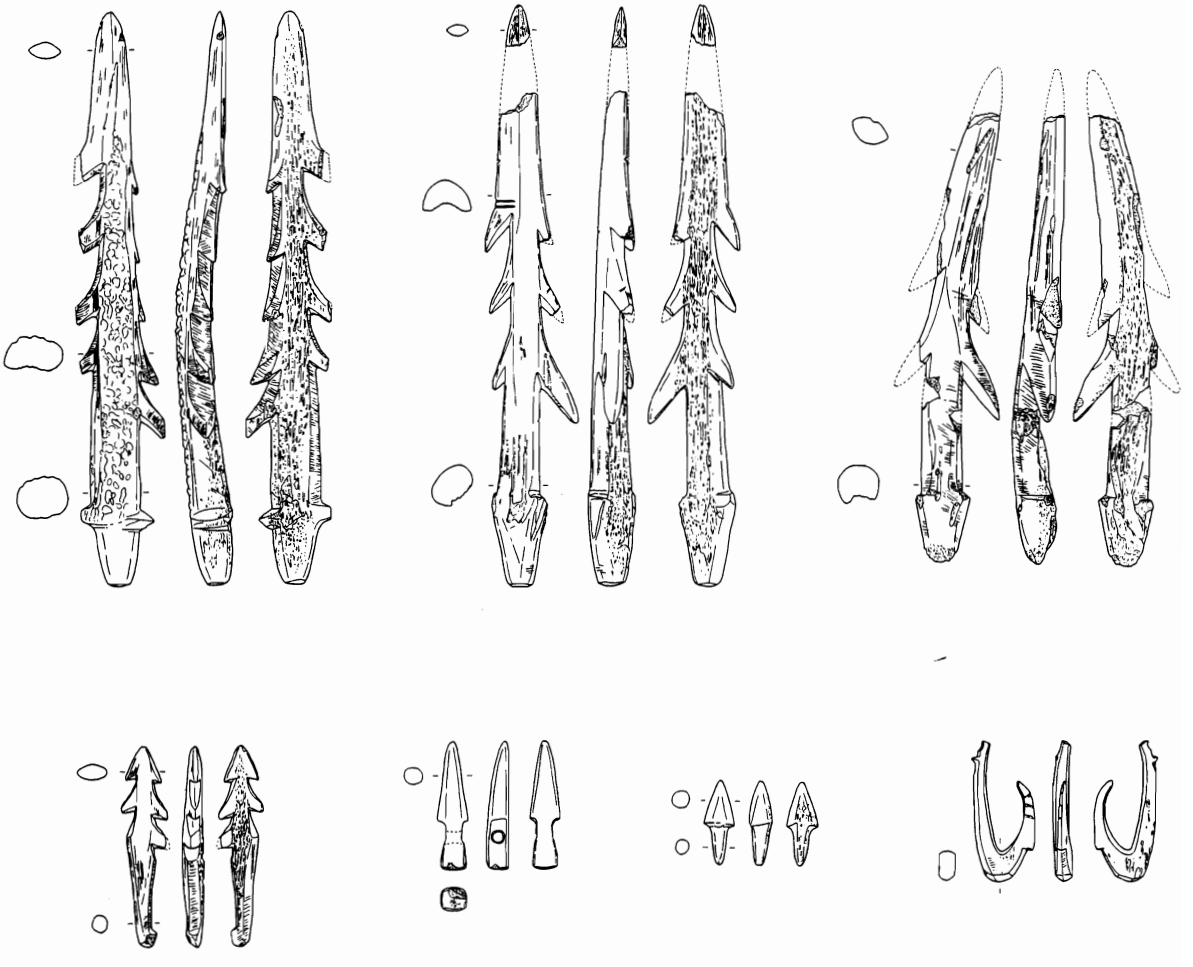
第25回 神奈川県遺跡調査・研究発表会

発表要旨



日　程　2001年10月13日（土）

場　所　平塚市中央公民館

主　催　神奈川県考古学会

後　援　神奈川県教育委員会

　　平塚市教育委員会

目　次

記念講演　「卑弥呼は何処に眠っているか」　苅谷俊介 氏 ---------- 1

〔調査発表〕

横須賀市　打木原遺跡 ---------- 13
藤 沢 市　藤沢市No.211遺跡 ---------- 19
横 浜 市　稲荷山貝塚 ---------- 25
横 浜 市　杉田貝塚 ---------- 31
平 塚 市　真田・北金目遺跡群 ---------- 37
海老名市　秋葉山古墳群 ---------- 43
葉 山 町　三ヶ岡遺跡 ---------- 49
小田原市　永塚下り畑遺跡 ---------- 55
秦 野 市　東田原中丸遺跡 ---------- 63
鎌 倉 市　鎌倉大仏周辺の調査 ---------- 67
横須賀市　向井將監正方夫妻の墓 ---------- 73

〔誌上発表〕

平 塚 市　構之内遺跡 ---------- 79
鎌 倉 市　史跡建長寺境内遺跡 ---------- 85
平 塚 市　市内の遺跡概要 ---------- 92

開　催　日　程

2001年10月13日（土）
平塚市立中央公民館

9:30～ 9:45　開会挨拶　神奈川県考古学会 会長　・平塚市教育委員会

〔調査発表〕

9:45～10:10	旧石器時代	横須賀市	打木原（うつきはら）遺跡
10:10～10:35	旧石器時代	藤 沢 市	藤沢市№211遺跡
10:35～11:00	縄文時代	横 浜 市	稲荷山（いなりやま）貝塚
11:00～11:25	縄文時代	横 浜 市	杉田（すぎた）貝塚
11:25～11:50	弥生時代	平 塚 市	真田（さなだ）・北金目（きたかなめ）遺跡群

12:00～13:00　昼休み

〔記念講演〕

13:00～14:00　「卑弥呼は何処に眠っているか」　苅谷俊介 氏

〔調査発表〕

14:00～14:25	古墳時代	海老名市	秋葉山（あきばやま）古墳群
14:25～14:50	古墳・古代	葉 山 町	三ヶ岡（さんがおか）遺跡
14:50～15:15	古　　代	小田原市	永塚下り畑（ながつかさがばた）遺跡
15:15～15:40	中　　世	秦 野 市	東田原中丸（ひがしたはらなかまる）遺跡
15:40～16:05	中　　世	鎌 倉 市	鎌倉大仏周辺（かまくらだいぶつしゅうへん）の調査
16:05～16:30	近　　世	横須賀市	向井將監正方（むかいしょうけんまさかた）夫妻の墓

〔誌上発表〕

①古　　代	平 塚 市	構之内（かまえのうち）遺跡
②中　　世	鎌 倉 市	史跡建長寺境内（けんちょうじけいだい）遺跡
③	平 塚 市	市内の遺跡概要

16:30～16:40　閉会挨拶　神奈川県考古学会　副会長

〔図書交換会〕

10:00～16:00　（神奈川県考古学会刊行書籍も取り扱っています。）

表紙：横浜市南区稲荷山貝塚出土骨角器

記念講演　卑弥呼は何処に眠っているか

～箸墓古墳の墳丘側面観察を踏まえて～

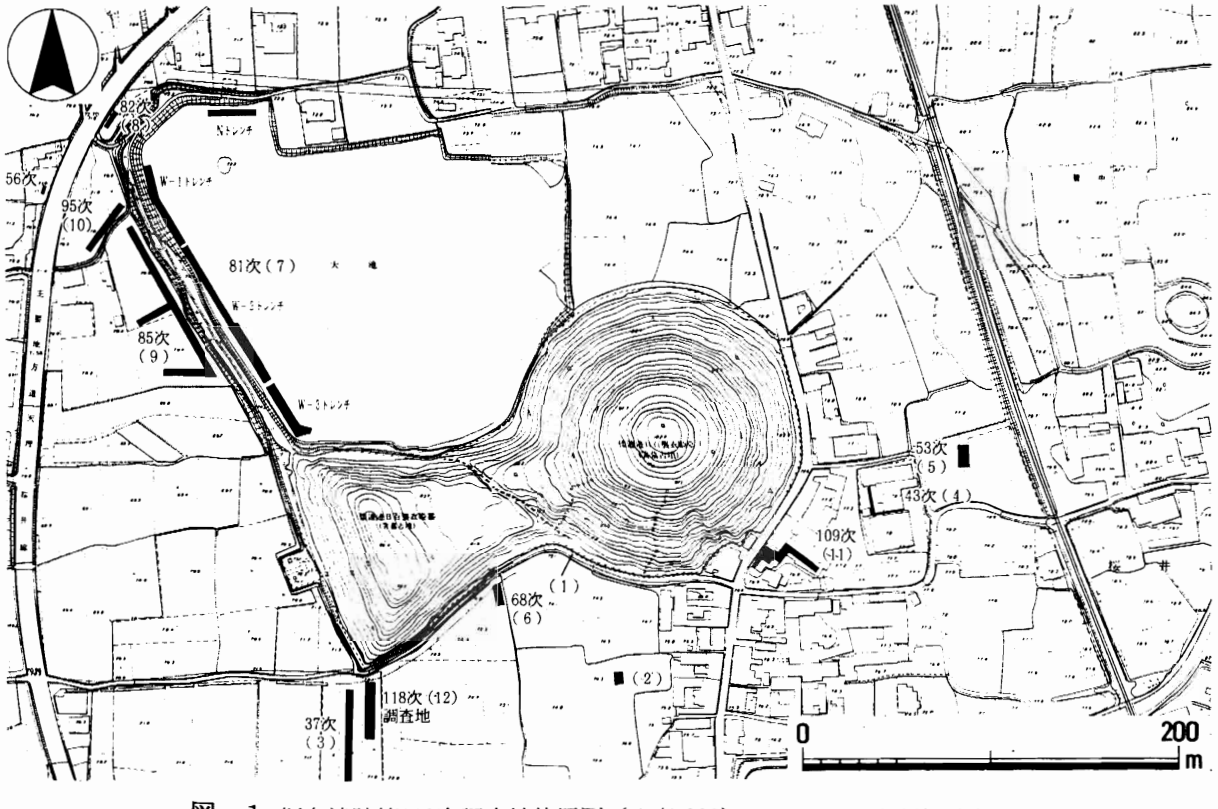
苅谷俊介

Ⅰ．はじめに

箸墓古墳は、奈良県桜井市箸中及び豊田地区の地図(註1)によると、墳長280m．後円部径155m(南北)．前方部前面幅130mを測る。この数値は帝室林野局測量(1947年廃止以前)の平面図、後円部径156m．前方部長126m．前方部前面幅132mにほぼ等しく、半世紀以上を経た今日も墳形に大きな変化はみられない。また、橿原考古学研究所、桜井市教育委員会により小規模ながら12次にわたる近接地調査が行われている（図－１）。

こうした中、平成10年9月22日、奈良県下を直撃した台風7号によって、墳丘の樹木は幹から折れたものや根こそぎ倒れたものが目立ち、南側から見た古墳の外観はそれまでと一変していた。書陵部資料一(註2)によると、倒木・根起き個所は29個所におよび、平成11年3月に倒木の除去・根起き個所の埋め戻しが行われている。箸墓古墳は宮内庁の治定陵であるため出土遺物や葺石・段築状況など墳丘内の情報を知る手がかりは書陵部資料に限られるが、この自然災害によりそれまで見えにくかった墳形をより詳細に観察することができた。その観察結果に書陵部資料の他、諸研究論文・墳丘隣接地発掘調査報告による総合的な検討を加え、墳丘の想定・想像を模索し、図化してみた。

その前に箸墓古墳の特徴を列記し、そこから推測し得る墳丘造営について二、三の問題点を整理しながら、筆者の考察を加えていくことにしたい。



図－１　纒向遺跡第118次調査地位置図（1/4,000）※カッコ内は箸墓古墳調査次数

Ⅱ．箸墓古墳の特異性

（１）特徴

箸墓古墳の築造時期は三世紀後半代に位置付けられているが、同時期の他の古墳と異なり以下のような特徴があげられてきた（④は筆者考察）。

①平地に全面盛土で構築され、同時期に異例の巨大規模の墳丘で突如出現する

②後円部五段、前方部側面に段築および葺石が認められず、前方部前面のみが四段構造をとる（図－２）

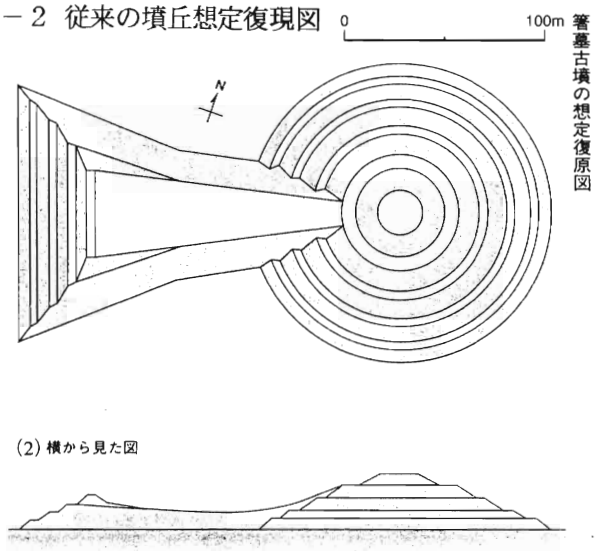
③前方部最上段採集遺物（二重口縁壷）と後円部墳頂採集遺物（特殊器台・特殊壷）に相違があり、両者の間に築造時期差または葬送祭祀の違いが認められる

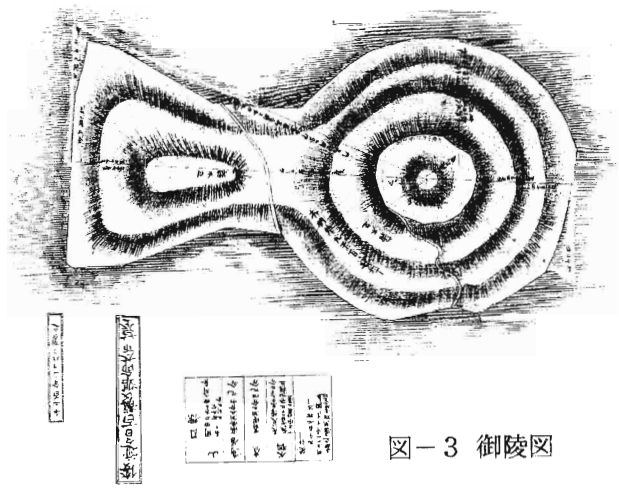
④広大な三世紀代の遺跡『纒向遺跡』の南北中央ライン南郊に位置する

⑤神と聖婚した特定巫女の死、神と人との共業造墓（箸墓伝承）が記録された異例の古墳である

但し、特徴②については、今回の観察結果からは前方部側面（南側）に段の存在を認めることができ、同側面（北側）大池の淵沿いに散乱する膨大な栗石の状況からは前方部側面の葺石を推定し得る。また、前方部側面の段の存在は明治12年10月調『御陵図』からも確認できる（図－３）。

図－２ 従来の墳丘想定復現図





図－３ 御陵図

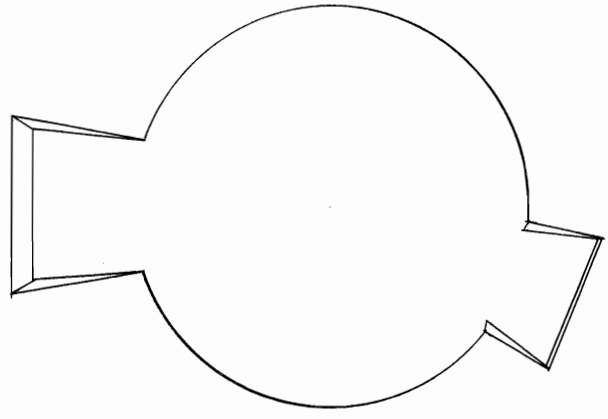
いずれにせよこれらの特徴は、古代国家黎明期の政治情勢・社会背景をものがたる重要資料であり、当該期の邪馬台国問題と密接に繋がる。

（２）特徴から推察される後円部先行築造の可能性

例えば②③の考古学的知見は、後円部と前方部の築造時期差を示す論拠ともなり、丸山竜平（註3）氏は葺石の状況と③を主体に、先ず円丘として後円部築造が完了し、その後に前方部が付設されたとする論を展開されている。筆者も後円部先行の可能性を考える一人だが、この説は魏志倭人伝記載の『卑弥呼以死大作冢径百余歩』との関連で注目される。しかし、纒向石塚古墳（３世紀初頭）（註4）、ホケノ山古墳（３世紀中葉）（註5）、纒向勝山古墳（３世紀中葉）など、既に100ｍクラスの前方後円墳の出現をみているにもかかわらず、ホケノ山古墳に次ぐ時期、もしくは併行期

で、しかも大王墓たる箸墓古墳が、なぜ築造当初から前方後円形ではないのか、なぜ完成した円丘に長大な前方部を付設しなければならないのか、という疑問に対しての説得力を欠くことが指摘されている。

図－４ 双方中円形想定概略図



もし、円丘(後円部)が先行して築造され、統轄権(支配権・王権)継承儀礼、葬送祭祀が完了していたと仮定すると、それは単なる円墳ではなく方形壇をもつ円丘、またはそれを二個所に付設する双方中円形の可能性も考えられる（図－４）。つまり③の後円部墳頂採集遺物(註6)が、吉備地方に起因する特殊器台，特殊壺(宮山型)、特殊器台形・特殊壺形埴輪（都月型)で占められていることから、墳形も吉備地方に系統する可能性を予測し得るからである。但し、現状では、箸墓後円部の東側一帯は宅地化しており、それらしき高まりも痕跡もない。

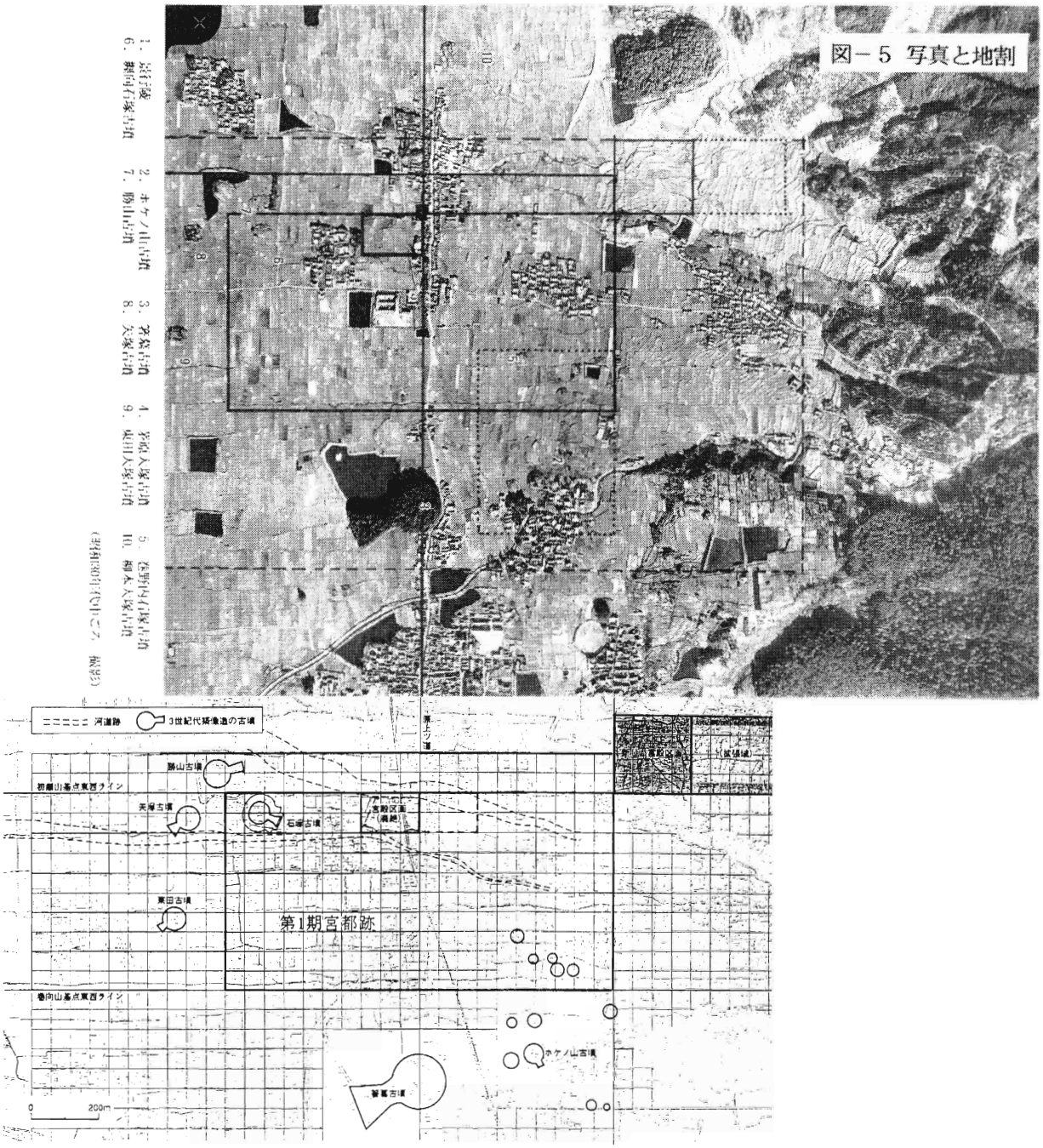
（３）特徴から推察される方形壇付円丘の可能性

しかし、箸墓後円部先行は否定されるものではなく②③の他、後述するが今回の観察結果からも推考できるし、④⑤からもその可能性を指摘し得る。それは主に次の二つに示されるが、先にあげた、大王墓たる箸墓古墳が、なぜ築造当初から前方後円形ではないのか、なぜ完成した円丘に前方部を付設しなければならないのかの疑問への説明でもあり、筆者が提唱する『箸墓後円部先行説』の背景でもある。

そのひとつは、中国の政治的祭祀の影響である。弥生文化の成立からしても、当該期の日本(以下、倭と記す)に最も強い影響力をもっていたのは中国である。貢献・献使、活発な交易等を通し中国王朝の礼法は、纒向石塚出現前夜の弥生後期、既に諸連合の首長層に定着し、葬送祭祀にも反映していたと思われる。本稿では詳述を省くが、纒向石塚古墳の前方部は三輪山々頂を遥拝する方向に造り出された低壇で、後円部から見る冬至の日の出は、三輪山南肩部のピーク(326m)から昇る。これは、縄文時代に生み出された倭的世界観(縄文信仰を統轄し創出された神「大物主神」)と、中国王朝の国家的祭礼の複合を如実に現している(註7)。中国王朝の国家的祭礼とは、冬至の日、皇帝だけが行う天と祖先の祭祀(註8)である。この祀壇(皇帝のみが祭事を行う高い壇、後の天壇に繋がる)は、方形壇を付設した円丘で国都の南郊に位置する(郊祀、郊壇)。漢魏洛陽城の南郊にある委粟山に造営された大礼の場祀壇は、『三国志』魏書明帝景初元年（237）冬十月の条に記されている。

この時期は、魏志倭人伝に記された邪馬台国の時代であり、全国に比類のない突出した大規模な遺跡が奈良盆地東南部三輪山麓に出現している。東西約2.3ｋｍ、南北約1.5kmの「纒向遺跡」である。但し、誤解してはならないのは、邪馬台国＝纒向遺跡ではなく、近畿一円から吉備方面の広域を勢力圏におく強大な政治勢力邪馬台国の中枢部が、纒向遺跡であると理解すべきである。言わば纒向遺跡は、現代の首都中枢部永田町に当たる。

そこで、纒向遺跡と箸墓古墳の位置関係を、図－５によって確認してみる。方形区画は筆者の想定であるが、１区画は後漢尺40歩×40歩で、57.16m角である。この地割り区画想定の詳細は、註７に記してある。図－５は、その方形区画と纒向遺跡の航空写真を、ほぼ同一縮尺で南北に並べたものである。纒向遺跡と箸墓古墳が、まさしく中国思想にもとずく計画で造営されていることを読み取ることができよう。更に、箸墓古墳が築造当初から現在のような前方後円形であれば、方形壇を付設した円丘としては、あまりにも方形部が長大すぎるという矛盾をきたしていることも一目瞭然である。こうした国家的重要祭祀は、古代中国の「天円・地方」の思想にもとづくもので、皇帝は冬至の日に『円丘』で天と祖先の祭祀を、夏至の日は『方壇』で地の祭祀を行う。箸墓古墳の長軸をみると、前方部は東西軸から22～23度南西に振れ、長軸は斎槻岳を向いている。箸中地区の人はこの山を夏至山と呼ぶそうであるが(註7P239)、仰角と方位から推定して、箸墓



古墳々頂から見る夏至の日の出はこの山から昇るものと思われる。つまり④⑤からは築造時の箸墓古墳が、天と祖先の祭祀を行う郊壇の位置に、倭独自の観念の許で、始祖の霊廟として造営された『方形壇付円丘』であったことが窺えるのである。また、纒向遺跡に各地方の土器が集中することもこの一大祭事と無縁ではなかろう。従って、箸墓古墳は築造当初から長大な前方部をもつ必要性はないと言える。このことは前方部が小さく未発達なホケノ山古墳が好資料となろう。

（4）特徴から推察される政治情勢と二回の墳丘造営

いまひとつは、弥生墳丘墓を源流とする前方後円墳の成立からである。近藤義郎氏はその高論(註9)のなかで、中国の政治・技術・観念の一定の影響の下であるが、前方後円墳は弥生墳丘墓が一つの統一物として飛躍的に継承され誕生したとされ、倭の首長連合によって主体的に創出されたことを考古学的に論証されている。それに積極的な解釈を加えることが許されるならば、弥生墳丘墓から前方後円墳への飛躍的継承のプロセスを二段階に分けることが可能で、それを箸墓古墳の築造過程に見出すことができる(先行する纒向石塚、やや後出する中山大塚も同様の検討の余地を残す)。箸墓古墳の築造を二期に分けた場合、第一期の方形壇付円丘箸墓は、弥生墳丘墓(原田中墳丘墓、楯築墳丘墓など吉備系)を源流にしながらも、その規模・高さ・段築・葺石など、墳丘において極端かつ格段の相違をもつことがあげられる。これは近藤義郎氏の指摘される、弥生墳丘墓が一つの統一物として飛躍的継承された姿である。つまり、第一期の方形壇付円丘箸墓の出現をもって飛躍的継承の第一段階とみなすことができる。またこれは当該期の政治動向と連動しており、諸連合が大和に集結し弥生墳丘墓の統括が行われたことを示唆し、各地域に分立する連合体(諸首長権)の統合が、大和地域においてなされはじめたことを意味している。このような重要な過渡期であるからこそ、築造当初の箸墓は最初から大和型(纒向型)墳形の前方後円形をとるよりも、連合体間の摩擦が生じにくい中国の国家的祭礼の場「郊壇」を模した『方形壇付円丘』が妥当と言えよう。

飛躍的継承の第二段階として、方形壇付円丘造営後短期間のうちに前方部が築造(特徴③から)され、系譜上纒向石塚を初源とする大和型(纒向型)墳形の前方後円形が完成する。従って、現在にその姿をとどめる箸墓の墳丘は、第二期で完成した箸墓古墳の姿である。円丘部に眠る被葬者と深い関係をもつ人物の墓所として、それまで「地の祭祀」のみを行っていた方形壇を更に盛土延長し、大規模な埋葬施設を造る必要があったものと考えられる。

この第二段階目の飛躍的継承によって、初めて統合の成立(首長権の統一・大王権の確立)を予測することができる。つまり、方形壇付円丘造営後前方部拡張のプロセスは、箸墓古墳築造計画当初から政治的に意図されていたと考えられるのである。筆者が後円部先行説を提唱するに至ったのは、このような政治情勢の反映が箸墓古墳の特徴①～⑤に強く認められるからである。この時点で初めて大王墓＝巨大前方後円墳の図式が完成し、初期大和政権の成立期を迎えるのであろう。①はそうした背景の許で理解すべきである。それはまた憶測として、後円部には弥生首長連合を統括した始祖的人物、前方部には全権統一に大きな役割を果たした人物の埋葬が、あらかじめ予定されていたことを匂わせ、箸墓古墳の被葬者像をより鮮明に考えることもできよう。

このような視点から箸墓古墳を捉え直した時、広大な『纒向遺跡』は中国都城の影響を受けながらも、『信仰センター的都市』という倭独自の展開を示した「三世紀代の宮都」(註10)であった蓋然性が高く、いわゆる邪馬台国の中枢に比定し得る（図－５）。

Ⅲ．墳丘

後円部

（１）五段目（最上段）

箸墓古墳後円部五段目について、白石太一郎氏ら(註11)は、四段築成の上に傾斜角の異なる底径42m、高さ5mの円丘(大円墳)をのせているので、外形上五段築成となるという見解を示されている。また、丸山竜平氏(註12)は、後円部は五段築成だが四段目の上に底径43m、高さ6mの円壇を設けた恰好であるとされている。更に、書陵部資料二(註13)の図面(半径)からは、径42～42.5m(自然堆積と思われる部分を除いた概数)高さ4～5mの数値が得られ、底径・高さともに三者はほぼ一致する。ところが、五段目上面について書陵部資料二の調査担当者は、最上段は広いテラスの内側に築かれた截頭円錐状の円丘で、数値は概数であるが上面は径17mの円形平坦面をなすとしている。白石太一郎氏らはそれを径22m、丸山竜平氏は径20.5mとするが、概数誤差であるとしても三者の差の大きさには問題が残る。ここに五段目上面の表面形態を推測する手がかりがある。この点については後述する。

（２）高さと段築

帝室林野局測量図によると後円部の高さ30m。丸山竜平氏26m、書陵部資料二の断面図からは27mが測れる。各段のテラスは下から、白石太一郎氏ら…4m、4m、4m、8m。丸山竜平氏…6m、6m、6m、7.5m。書陵部資料二…5m、5m、6m、8mで、いずれも四段目テラスが群を抜いて広い。

各段の高さについては、墳丘調査を行った書陵部資料二に限ることとする。それによると、高さは下段から2m、4m、6m、6m、4mで、最上部まで22mとなり先述した数値27m(断面図より)に大きく矛盾する。しかしこれは、測点間(現状の北側裾部と最上部中央付近を結ぶ線)のみを忠実に記録した概数で、類推ではない。担当者も、最下段(2m)は実際よりもっと高くなることを指摘している。

（３）五段目の考察と各段傾斜面角度

五段目の底径は前項（１）で述べたように42m、43m、42～42.5mの数値で一致している。ところが、上面の円形平坦面の径は、書陵部資料二の17mに対し、白石太一郎氏らは22m、丸山竜平氏は20.5mと差異がある。この違いは傾斜面の角度に大きな誤差を生じさせることになり、墳丘想定復原に支障をきたす。後述するとしておいたこの点を明らかにしておきたい。

地図(註１)によれば、五段目上面の円形平坦面(以下、五段目上面とだけ記す)の平均径は17～18mであり、書陵部資料二の計測値にも合致する。次に、同資料の墳丘断面図によると、五段目上面が明瞭に傾斜しはじめる点は半径10m付近である。この地点から上部を五段目上面にとると直径は20m程になり、白石太一郎氏らの径22m、丸山竜平氏の径20.5mと齟齬をきたさない。つまり、測点を五段目上面の明瞭傾斜点にとれば三者の数値は一致し傾斜面角度が得られる。

これで差異は解消するが、書陵部資料二と、地図(註１)の102mコンターを目安に確かめられる径17mの五段目上面の問題が残る。そこでいま一度、書陵部資料二の断面図を観察すると、五段目上面の緩やかな傾斜がはじまる点から明瞭に傾斜しはじめる点までの距離は3m程で、比高差は1m程ある。つまり、五段目上面は、径17m付近からごく緩やかに傾斜しはじめ、径20m付

近(比高差1m)で明瞭な斜面を形成していくものと思われる。前項　において、五段目の高さは4～5mの数値が得られると述べたが、これは五段目上面外周部が1m程低いため生じた差である。これを倒木・枝葉の風化・腐食土による自然堆積と短絡的に解釈することもできるが、この比高差こそ重要で、五段目上面の表面形態をものがたるものと思われる。つまり、五段目上面外周部は約2～2.5m幅で全周するテラスを残し、その内側に高さ約1mで法面をもつ「石囲い低円壇」もしくは「亀甲状の積石」が存在することを示唆している。書陵部資料一からもその状況が窺え、書陵部資料二の執筆者が、径17mと記録する五段目上面はそれに該当し、断面図からも推察し得る。白石太一郎氏らや丸山竜平氏がそれぞれ推定する五段目上面の径、22m、20.5mは、一段低く全周する小テラスの外縁(明瞭傾斜点)までを含んでいるものと思われる。

従って五段目は、概数で底径42m、高さ5m、上部径20m、傾斜面角度約25度が妥当と思われ、その上に幅2～2.5m程の全周する小テラスを残し、内側に径17m、高さ1m程の『石囲い低円壇』もしくは『亀甲状の積石』を想定することができよう。いずれも埋葬施設上部の可能性が高い。

前項（1）・（2）による各段の高さ・テラス幅からそれぞれの底径が導かれ、これに墳丘観察を加味すると、四段目までの傾斜面角度約35度、最上段五段目は25度が得られ、後円部高28～28.5mとなる。

前方部

（4）段築のある側面

前方部南側側面のくびれ部付近に、前方部先端方向(西方)にかけて続く段が観察できた。高さは道路面から約3mである。くびれ部付近ではその段から上約3mで平坦面となっている。感覚的には、樹木の間から墳丘越しに北側の大池が見えるのではないかと思われる程低い。前方部側面の段築は認められないとされているが、今回の観察(但し南側側面)で得られた知見が築造時の段であるとすると、テラス幅は不明としても、くびれ部付近は二段築成の可能性が考えられる。しかし、この段の延長(東方向)は後円部には観察できず接続していない。後円部一段目と思われる段はそれより約3mほど高く、くびれ部最上部の平坦面との整合性をもつ。これは後円部築造の後、前方部築造の可能性を考慮させる結果となった。築造差の問題は別にして、前方部側面の段築については橋本輝彦氏も指摘(註14)されている。

（5）段築のある前方部先端部側面

生垣の奥、道路面から高さ約4m付近に段が観察され、やや下がりながらくびれ部方向に延びるが、全体の把握はできなかった。おそらく、くびれ部付近で観察された3m程の段につながるものと思われる。前方部南端の道路から最上部を見上げると、樹木の枝が激しくなぎ倒され、高さはかつてより極端に低く斜面角度も緩やかに感じられ、更にもう一段存在しているように見えたが確認できなかった。

（6）前方部前面の段築と最上部の高さおよび傾斜面角度

最下段を第一段とし書陵部資料二の概数を表にした。但し、傾斜面とは同資料の斜距離のことで、第一段目は生垣部の狭い平坦面を含み、平坦面とは同資料の緩斜面のことである。この表から、前方部最上部までの高さは15～16m。第四段目を除く各傾斜面角度35度が推察され、

	傾斜面長	平坦面幅	高　さ
第一段	7.5～9	2～3	4～4.5
第二段	4.5	5	2.5
第三段	7.5	3.5	4.5
第四段	10	5～6	4

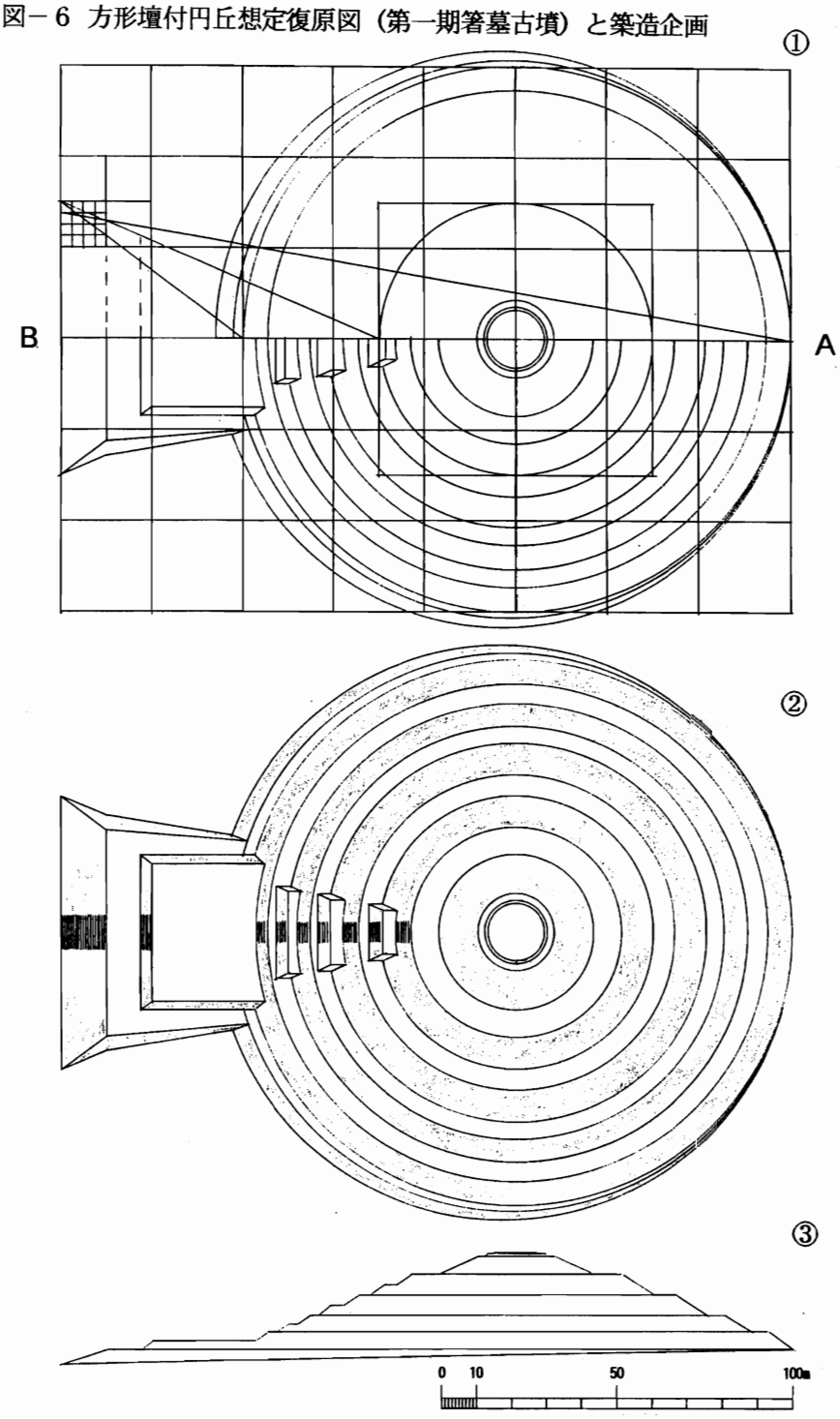
項目の（4）からは、くびれ部の高さ約6〜7mトルが得られる。

Ⅳ．墳丘の想定復原・第一期箸墓古墳

箸墓古墳の立地する纒向川扇状地西端の地形は東高西低で、現在でも後円部東側地表面は標高約77m、前方部南西端部は約72mであり比高差はほぼ5mある。更に、前方部北西端部は南西端部より約2m低い。築造当初の比高差は、現在のそれより少し大きいものと推測される。

そうした立地条件の下で墳丘を構築するにあたっては、レベルを均一にするための地山整形が行われた筈である。そのため西側の前方部端では、高さ5〜6mの盛土整形(基段)が成されていると思われる。その面を最下段とした場合、先行して築造されたと考えられる方形壇付円丘(後円部)は、図－6のA－B軸で、東側五段、西側六段の段築となり、最下段が基段を兼ねた『方形祭壇』となり得る。図の1区画は、『古代学研究』89号(註15)の大尋16尋にあたり、26m角である。図のように、後円部6分割法が初期古墳の築造企画の基礎にあると考えているが、ここでは説明を省略する。円丘に三ケ所の拝壇を想定した

図－6 方形壇付円丘想定復原図（第一期箸墓古墳）と築造企画



が、等高線の乱れをこの拝壇の崩落(図－１参照)のためと推定し、図示してみた。四段目テラス(幅約8m)までは木段を仮定した。駆け足ゆえ説明不足となってしまったが、以上が『方形壇付円丘』の想定復原図である。これを「第一期箸墓古墳」とし、前方部盛土拡張後の前方後円形を「第二期箸墓古墳」として捉えることにしたい。

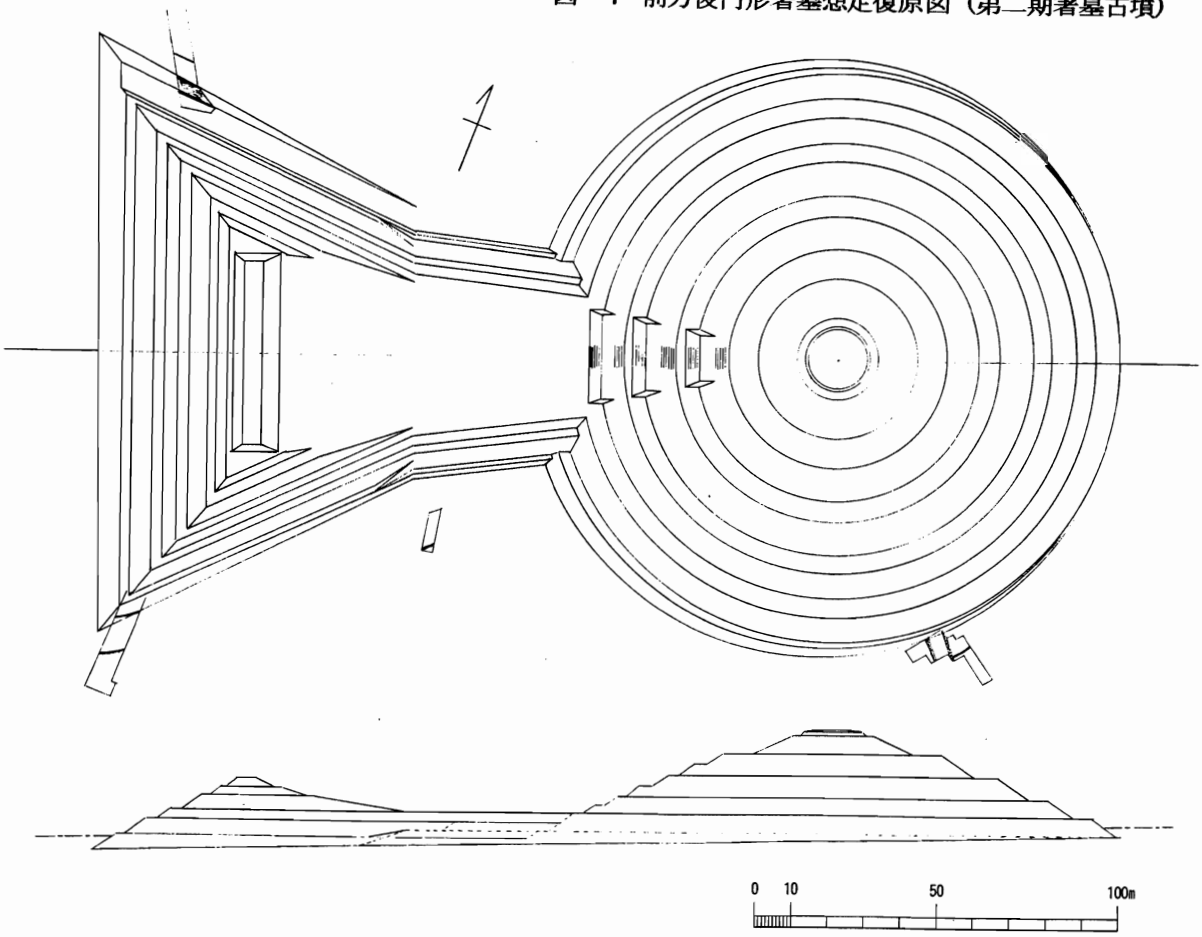
Ⅴ．墳丘の想定復原・第二期箸墓古墳

紙面の都合上、図の概説と規模のみを記す。図－７は、側面観察(南側)で得た情報に基ずく想定復原図である。墳丘平面図の前方部両端隣接地、ばち形に開く南側近接地、後円部南側隣接地、以上４ケ所は、図－１の調査地点に対応する。トレンチ中の太線は検出された遺構と葺石(黒塗り)である。断面図の墳丘内破線は、第一期箸墓古墳の基段と方形壇を表す。一点破線は、現地表面で、後円部第一段の凡そ下半分と、前方部基段部のほとんどが地表下に埋もれていると思われる。

第二期箸墓古墳(前方後円形)の規模を記しておく。但し、基段と考えられる部分は除く。

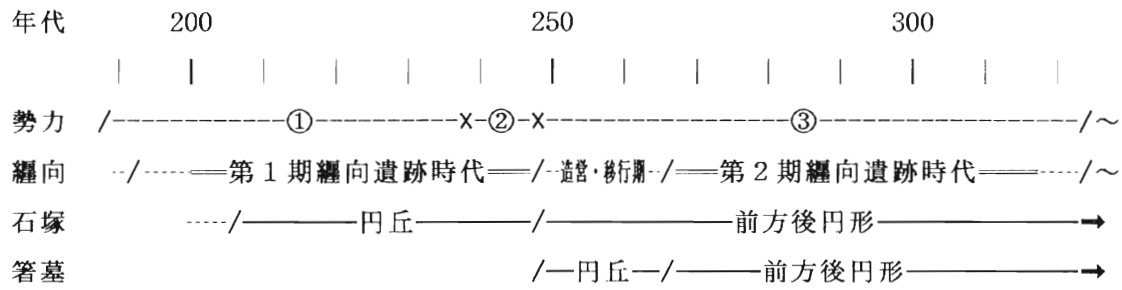
全長277m、後円部径156m、前方部長121m、前方部前面幅134m、後円部高さ28～28.5m、くびれ部高さ6～7m、前方部高さ16～17m。後円部五段、前方部五段、くびれ部側面二段、前方部先端部側面五段。

図－７ 前方後円形箸墓想定復原図（第二期箸墓古墳）



追加資料

【第１期・２期纒向遺跡の消長と石塚・箸墓の関係】（拙著「現れた邪馬台国の都」『まほろばの歌がきこえる』年表Bの原本より）

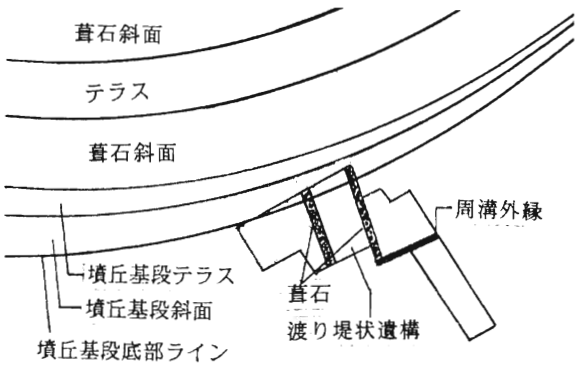


勢力 ①----畿内・吉備連立（邪馬台国時代・初期大和政権黎明期）

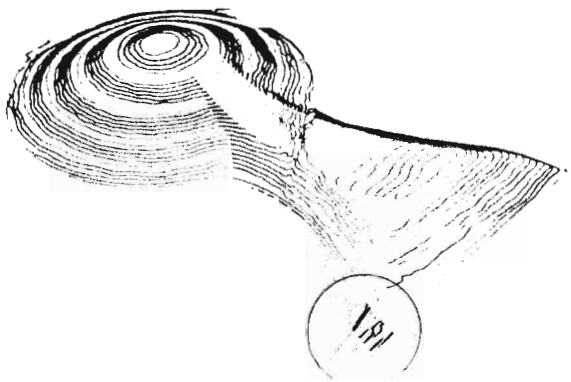
②----東海以東勢力（狗奴国）との抗争期

③----畿内・吉備・東海連立（初期大和政権確立期）

※ ここで使用した円丘とは『方形壇付円丘』のことを指す



H10調査地拡大図



渡り堤状遺構

基段と思われる葺石

註記

（1）箸中地区、豊田地区1/1000地図　桜井市教育委員会　1982

（2）徳田誠志・清喜裕二「倭迹迹日百襲姫命大市墓被害木処理事業(復旧)個所の調査」『書陵部紀要』第51号　宮内庁書陵部　1999年度

（3）丸山竜平「倭迹迹日百襲姫命墓(箸墓・大市墓)」『天皇陵総覧』新人物往来社 1993

同「弥生式土器の終焉-稲籾貯蔵壷の消滅と古墳文化の成立基盤-」『古代研究』第10号　元興時文化財研究所考古学研究室　1976

（4）石野博信・関川尚行　橿原考古学研究所編『纒向』桜井市教育委員会　1976

橋本輝彦『第八次・纒向石塚発掘調査の概要』桜井市教育委員会　1996

（5）『ホノケ山古墳第四次調査現地説明会資料』大和古墳群調査委員会　2000

（6）註（2）および中村一郎・笠野毅「大市墓の出土品」『書陵部紀要』第27号　宮内庁書陵部　1975

（7）苅谷俊介「現れた邪馬台国の都」『まほろばの歌がきこえる』エイチアンドアイ社　1999

（8）山尾幸久「日本古代王権の成立過程(中)『立命館史学』第297号　1968

（9）近藤義郎「前方後円墳の誕生」『日本の考古学』第六巻変化と画期　岩波書店　1986

(10) 全掲註（7）纒向遺跡を初期ﾔﾏﾄ王権の都宮に規定したのは寺沢薫氏が初源である 拙著註（7）は信仰センター的宮都としており、寺沢氏の高論とは観点を異にするので、誤解を招かないように氏の高論掲載書を記す

寺沢薫「纒向遺跡と初期ﾔﾏﾄ政権」『橿原考古学研究所論集』第6　吉川弘文館　1984

(11) 白石太一郎・春成秀爾・杉山晋作・奥田尚「箸墓古墳の再検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』第3集　1984

(12) 前掲註（3）に同じ

(13) 笠野毅・土生田純之「大市墓の墳丘調査」『宮内庁書陵部紀要』第40号　宮内庁書陵部　平成元年

(14) 橋本輝彦「箸墓古墳の調査」『大美和』九七号　大神神社　1999.7

(15) 石部正志・田中英夫・宮川徒・堀掘田啓一「畿内大形前方後円墳の築造企画について」『古代学研究』第八九号　古代学研究会　1979

図版・写真

地図－1『平成12年度国庫補助による発掘調査報告書』 桜井市教育委員会　2001.3.31

図－2　苅谷俊介「現れた邪馬台国の都」『まほろばの歌がきこえる』 ｴｲﾁｱﾝﾄﾞｱｲ社　1999

図－3　『御陵図』明治12年　制作者不詳

図－4　苅谷俊介「箸墓古墳は語る」『大美和』100号　2000.9作成を改変

図－5　写真『ﾎｹﾉ山古墳』第17回橿原考古学研究所公開講演　2000.11より転載加筆

地割図 苅谷俊介「現れた邪馬台国の都」『まほろばの歌がきこえる』エイチアンドアイ社　1999

図－6　苅谷俊介「神奈川県考古学会」第25回神奈川県遺跡調査・研究発表会資料として作成　2001.8.26

図－7　同上

地図－1および図－7に係わる発掘調査地

清水真一「箸墓古墳南隣接地の調査」『箸墓古墳南・上之宮遺跡第七次発掘調査報告書』 桜井市教育委員会 1993

寺澤　薫「箸墓古墳発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1994年度』橿原考古学研究所　1995

橋本輝彦「纒向遺跡第109次調査概要報告」『平成10年国庫補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会　1999

橋本輝彦「纒向遺跡第118次調査概要報告」『平成10年国庫補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会　2001

メ　モ

横須賀市 打木原（うつきはら）遺跡

― 姶良Tn火山灰降灰以前の土坑群の調査 ―

佐藤　明生

所 在 地　横須賀市長井4丁目無番地
調査機関　横須賀市教育委員会
調査担当　佐藤明生
調査目的　公園整備
調査期間　2000年10月24日～2001年3月30日
調査面積　11,492㎡

第１図　遺跡位置図

１．遺跡の立地

本遺跡は三浦半島西岸の中ほど、相模湾に突き出た独立丘を呈する長井台地に所在する。台地上はその中央を最高所として末広がりの緩斜面を形成しており、本遺跡は台地南側中央に位置する。

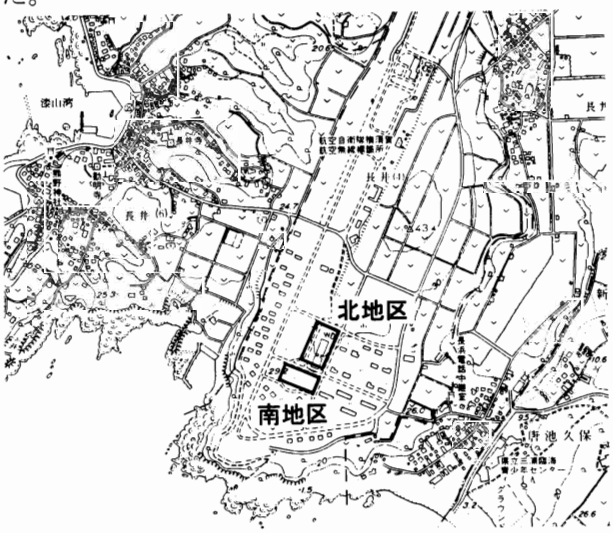
台地の現況は北半が住宅地・学校・自衛隊・農地、本遺跡を含む南半が米軍長井住宅地区跡地（以下、跡地とする）と農地・米軍施設などである。

横須賀市教育委員会は1986年から遺跡所在の不明であった跡地の試掘調査を実施した。その結果、本遺跡を含め４遺跡を確認し、長井台地上の遺跡分布の概要が明らかになった。それによると、台地北端には弥生後期～古代の集落址「内原遺跡」「小舞原遺跡」、台地中央に古墳後期～古代の「長井高原遺跡」、台地南端に弥生後期～古墳前期の集落址「佃嵐遺跡」が所在する他は、旧石器時代と縄文早期の遺構・遺物が散漫に分布する程度であることがわかった。ただし、旧石器時代に関しては姶良Tn火山灰（以下、ＡＴとする）降灰以前の土坑2基の検出に加え、1998年の長浜ノ上遺跡（本遺跡東側）の調査において三浦半島で始めてＡＴ降灰以前の石器が出土したことにより、当該期の遺構・遺物のあり方が注目されるようになった。

２．調査経緯

横須賀市は跡地を都市公園として活用するために、調整池等掘削工事が明らかな箇所について本発掘調査の実施を決めた。調査は市緑政部から依頼を受けた市教育委員会が実施した。

調査は調整地計画地を主体とする北地区、調整地建設に伴い削平が予想される南地区の2地区を対象とした。このうち南地区については、跡地の試掘調査で細石刃ブロック2基および縄文時代の集石遺構の所在が明らかになっていた。



第2図　調査区配置図

３．調査概要

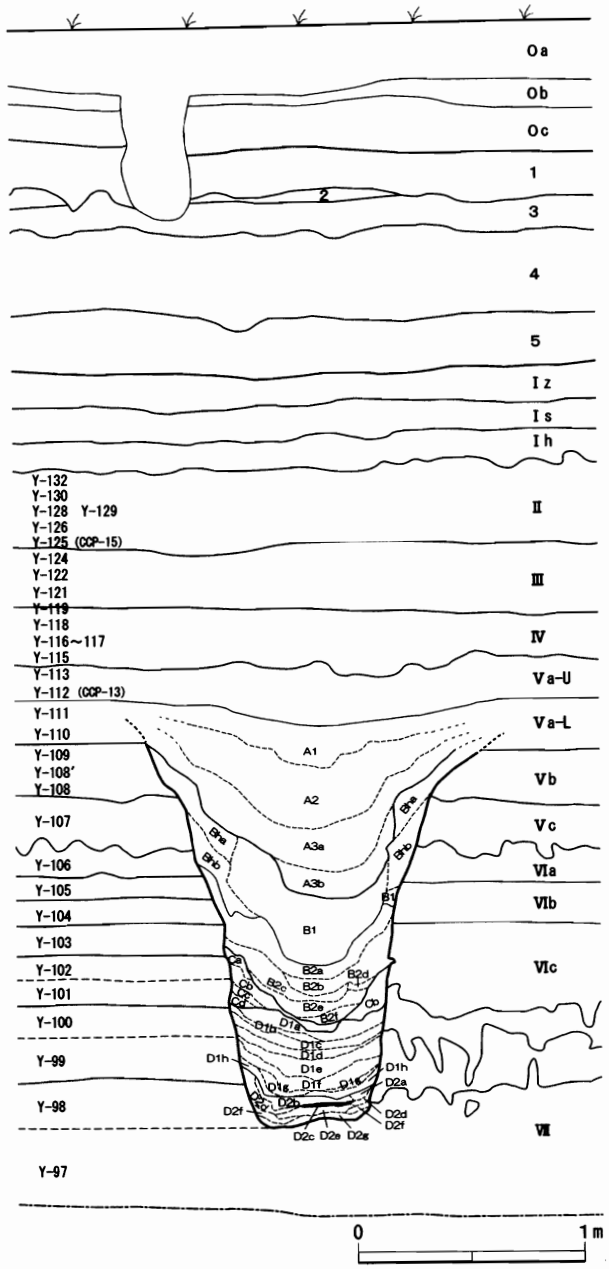
旧石器時代

大きく二つの文化層を検出した。第1文化層は、北地区のＡＴ降灰以前の土坑群と石器ブロック8基である。両者の時期的な関連は残念ながら明確にできなかったが、同一時期ではなくとも大きな隔たりはないと考えている。第2文化層は南地区の細石刃ブロックである。今回新たに1基を加え、計3基のブロックが近接して所在することが明らかになった。

ＡＴ降灰以前の土坑群：北地区の北隅から南東方向にかけて計9基の土坑が一つのライン上に並ぶように検出された（SK01～09）。その配列は緩やかな台地上の所在するためか大きく地形の制約を受けていないようだが、北側の高所から南東部の低所に向かっているように看取される。なお、跡地の試掘調査で検出していた2基の土坑も同様のもので、位置はSK09の北北東75m、大きく見れば同じライン上に配置している可能性がある。

これらの土坑群は検出状況や形態など共通する特徴が多く同時存在かほぼ同時期の可能性が極めて高い。まず第1の特徴として、直線上あるいは緩やかの弧線上に一列に並んで検出されることである。もう少し細かく見ると、9基のうち北側の5基（SK01～04・09）は弧を描いて並び、南側の4基（SK05～08）はほぼ直線上に並ぶ（N-30°-W）。隣接土坑の間隔は、配列のやや異なる北側と南側の間が26mと最も離れており、北側の5基は6m～14.5mとバラツキがあるが、南側の4基は9.5m～10.5mと間隔がほぼ揃っている。

第2の特徴として形態である。開口部・底部ともに円形で、開口部がやや広がる筒型を呈することで共通する。規模は各土坑の検出面が一定でないが、長井台地Ｖa層下部における規模を推定すると開口部径1.20m～1.50m、底部径0.42m～0.60m、深さ1.50m～1.70mである。第3の特徴として覆土の堆積状況である。いずれも自然堆積で各土坑とも非常に近似している。覆土中下部には壁崩落に由来する地山層の堆積が特徴的であり、この壁崩落土層を基準に



第３図　SK08土層断面図

各土坑ともＡ・Ｂ・Ｃ（壁崩落土層）・Ｄの4層に大きく分層し、比較することが可能となった。

その他、土坑下部に堆積するＤ層中（SK08では坑底上5cm＝Ｄ2c層）に、ごく薄い炭化物層が検出されたため、状態の良いものについて放射性炭素年代測定を実施した。その結果は第1表のとおりである。

第１表　放射性炭素年代測定結果（註１）

土坑・層位	測定年代	13C/12C	補正年代	Beta-
SK01・D層	25270±300	-25.2	25270±300	155454
SK05・D層	23820±130	-25.9	23810±130	155455
SK08・D層	24390±140	-25.5	24380±14	155456
SK09・D層	21020± 90	—	—	155457
長井VI層	30780±230	−6.3	30760±230	155458

ＡＴ降灰以前の石器ブロック：北地区から石器・剥片等の集中箇所8基を検出した（石器ブロックSX05～12）。北地区南壁中央にSX05、そこから北へ20mほどにSX06と07、さらに20～35m北にSX08～12の5基がある。SX08～12はSX10の1基を除いて（やや反れる）、直線上にほぼ等間隔に並んでおり、その方向はN-31°-Wと土坑SK05～08の配列方向に近い。

各ブロックの出土点数は26点から191点と差があるが、石器の数と器種の少なさ、硬質細粒凝灰岩を主体とする石材構成（註2）、少量の母岩などについて類似した傾向にあり、概ね同一時期と考えられる。8基のブロック全体の総数は650点で、器種構成はナイフ形石器1点、台石1点、敲石5点で、その他は剥片・砕片類である。二次加工や微細剥離を有する剥片なども少ない。剥片は縦長剥片もあるが縦横比が１：１に近いものが多い。また、両極打法による剥片剥離も認められる。

細石刃ブロック：試掘調査で検出していたSX02・03に加えて今回SX04を検出した。出土総点数はSX02＝268点、SX03＝188点、SX04＝178点、合計634点。細石刃石核は計11点。細石刃以外の石器は出土しなかった。石材の主体は上多賀産と推定される黒曜石で八ヶ岳産と推定される黒曜石を若干含む（註3）。その他、硬質細粒凝灰岩・ガラス質黒色安山岩などがごく少量検出されたが、細石刃は黒曜石のみである。

本遺跡の細石刃石核および細石刃製作工程は、藤沢市代官山遺跡に類似した特徴を見出すことができる。①打面が自然面か単剥離面で細かい打面調整がないこと。中には細石刃剥離作業面以外に調整剥離のほとんど認められないものもある。②母岩となる黒曜石（上多賀産）が節理面で矩形に割れやすい直方体状で、はじめから石核としての形状を備えていること、加えて母岩そのものが小さいこと。③細石刃石核の側面調整は接合資料が少ないながら「細石刃剥離の進行に伴い順次施される」といった傾向が認められること。

縄文時代

草創期：（南地区）有茎尖頭器1点。

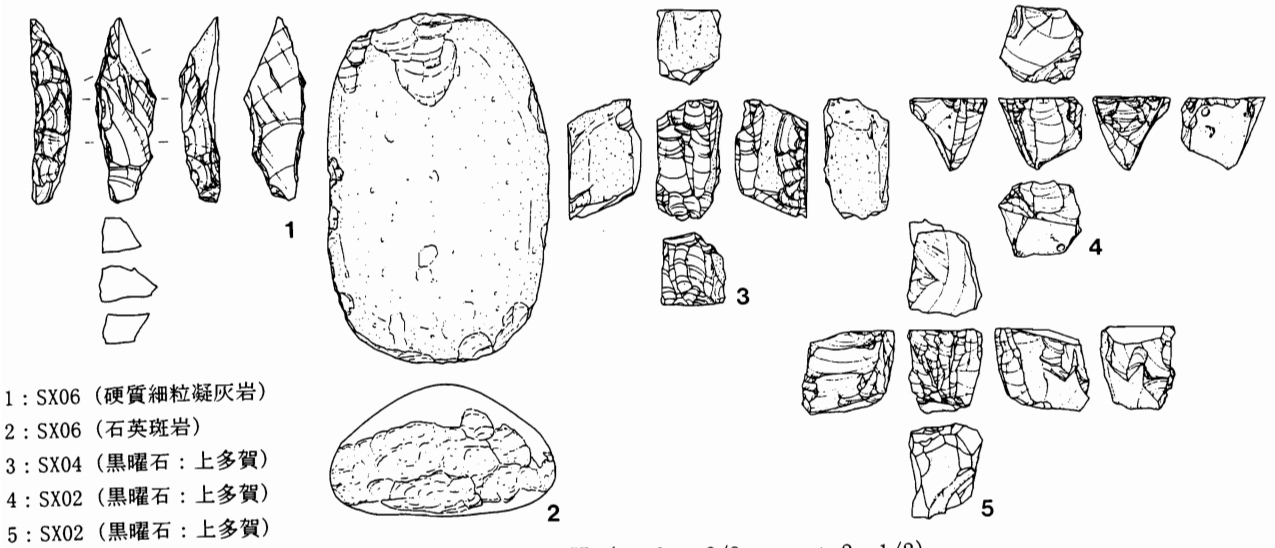
早期：（北地区）土坑18基、石鏃1点。（南地区）土坑15基、集石遺構1基（SX01）、土器片9点、石鏃・磨石・礫器各1点、焼礫・礫265点。土坑は径1mほどの円形を呈し、浅い皿状のものとすり鉢状のものがある。土坑内からの出土遺物はない。集石遺構SX01は12×10mの範囲に焼礫がやや散漫に分布する。出土土器は、遺存状態が悪いが早期の無文土器に位置付けられ、集石遺構内やその近辺から出土している。

註

1　長井Ⅵ層は相模野台地L5層に相当（土坑内炭化物の比較資料として測定）。年代値は1950年を基点とした年数。分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託。

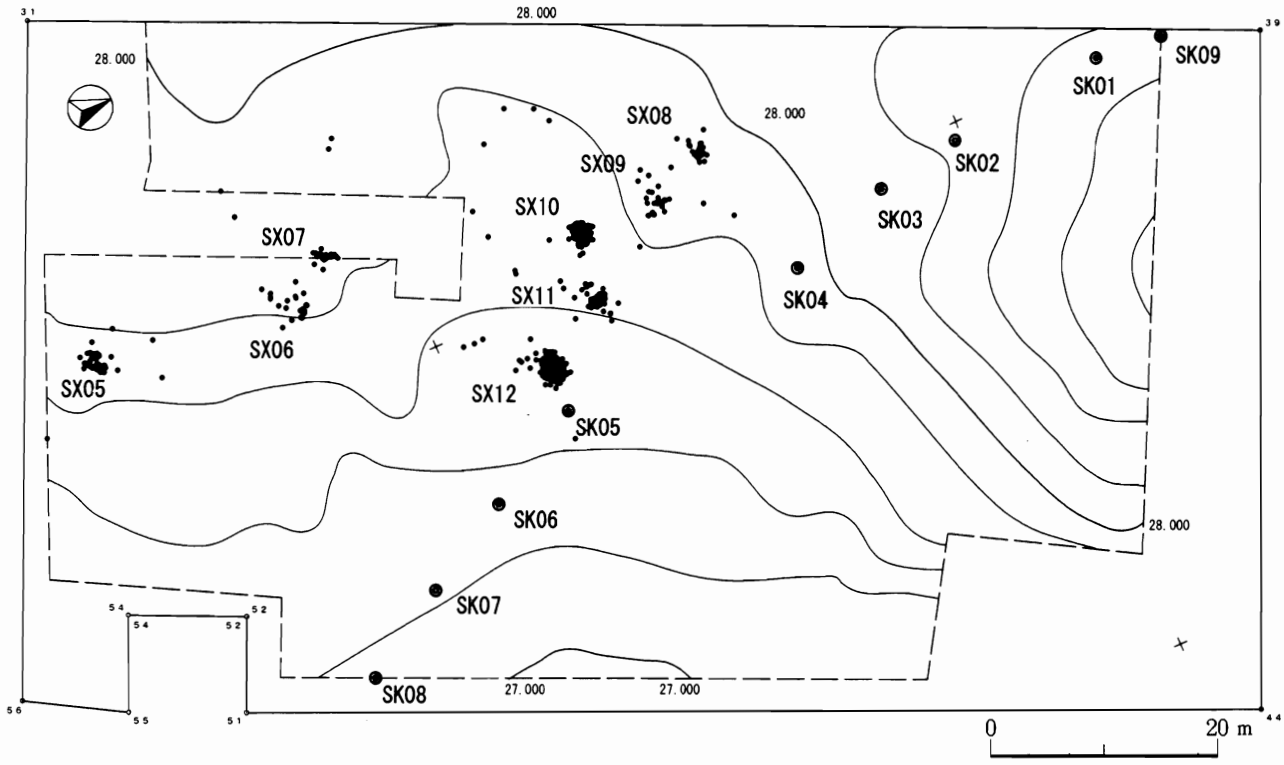
2　石材鑑定は柴田徹氏。なお、黒曜石は3つのブロックから計39点出土しており、近く産地推定分析を行う予定。

3　黒曜石（試掘調査分）の産地推定分析は望月明彦氏。

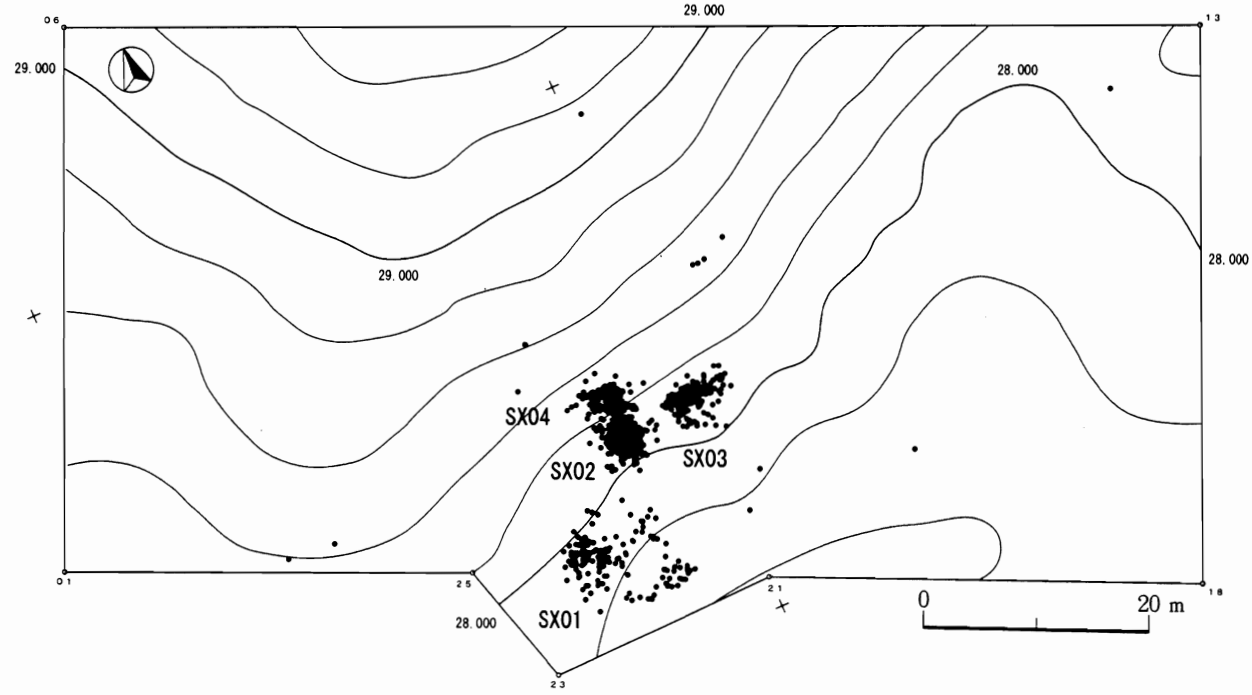


1：SX06（硬質細粒凝灰岩）
2：SX06（石英斑岩）
3：SX04（黒曜石：上多賀）
4：SX02（黒曜石：上多賀）
5：SX02（黒曜石：上多賀）

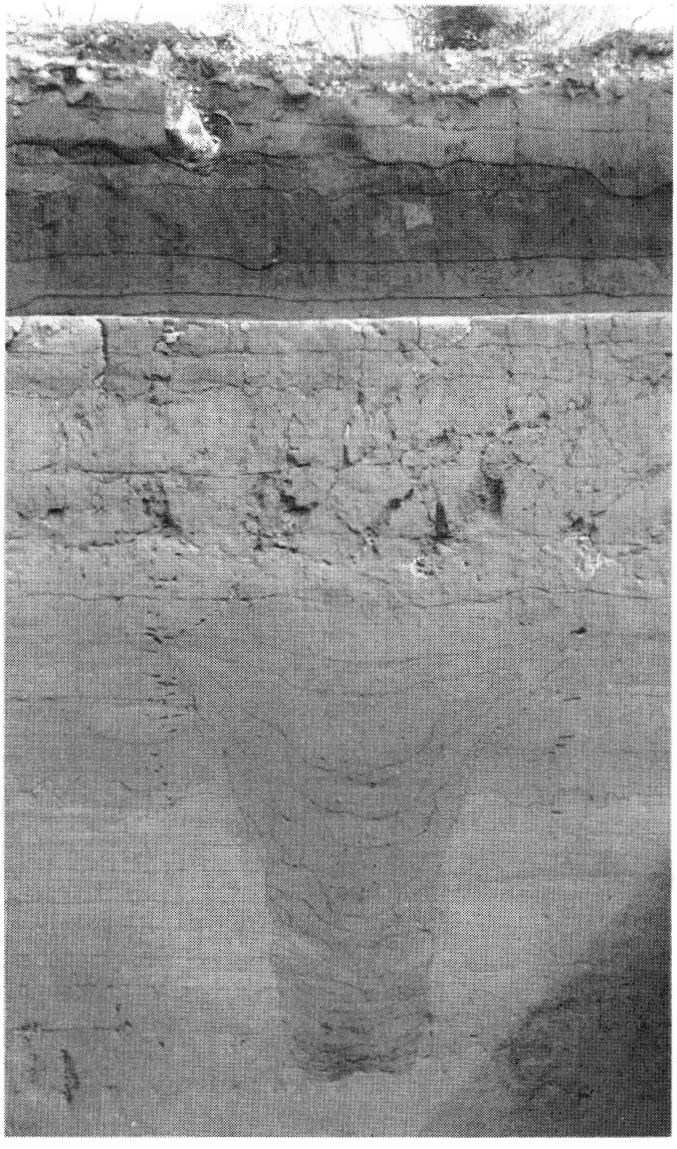
第４図　主な出土石器（scale＝2/3, except 2＝1/2）



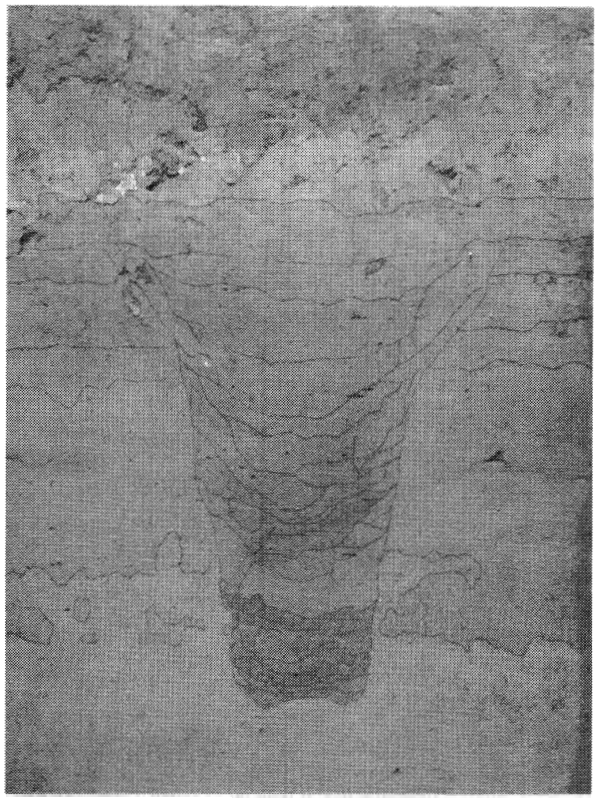
第５図　打木原遺跡北地区遺構・遺物出土分布図（Vb層上面）



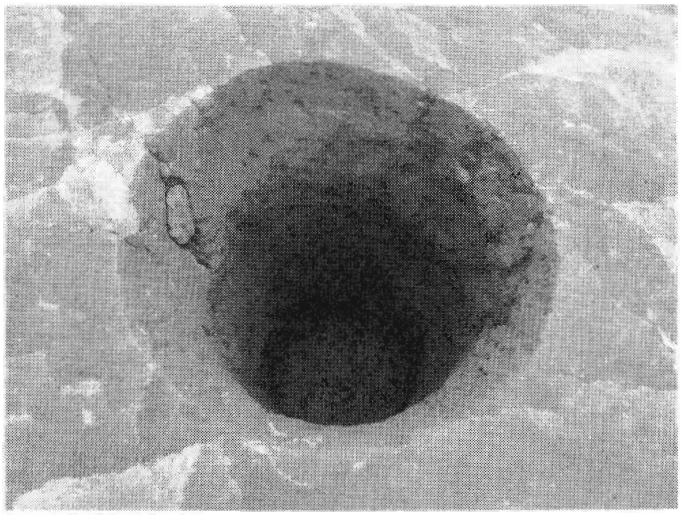
第６図　打木原遺跡南地区遺構・遺物出土分布図（Ｉs層上面）



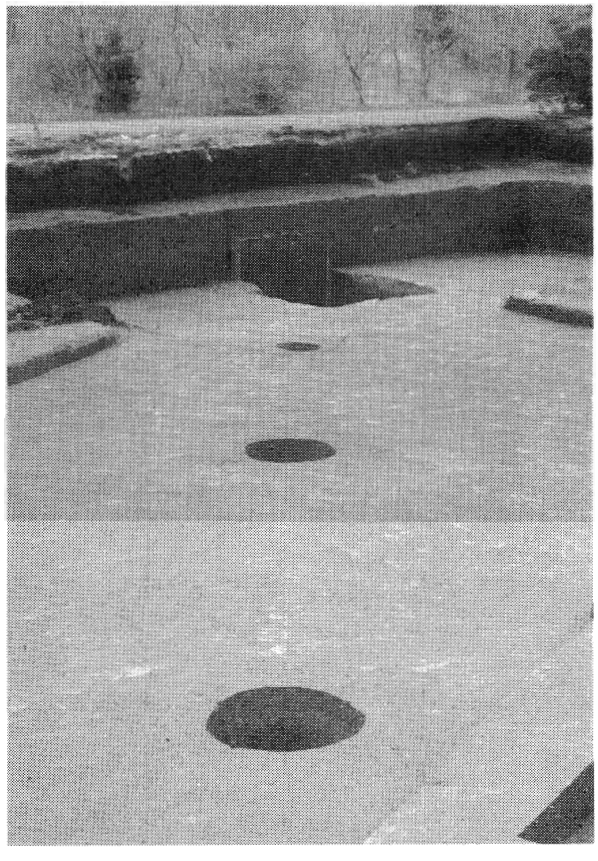
SK08 断面



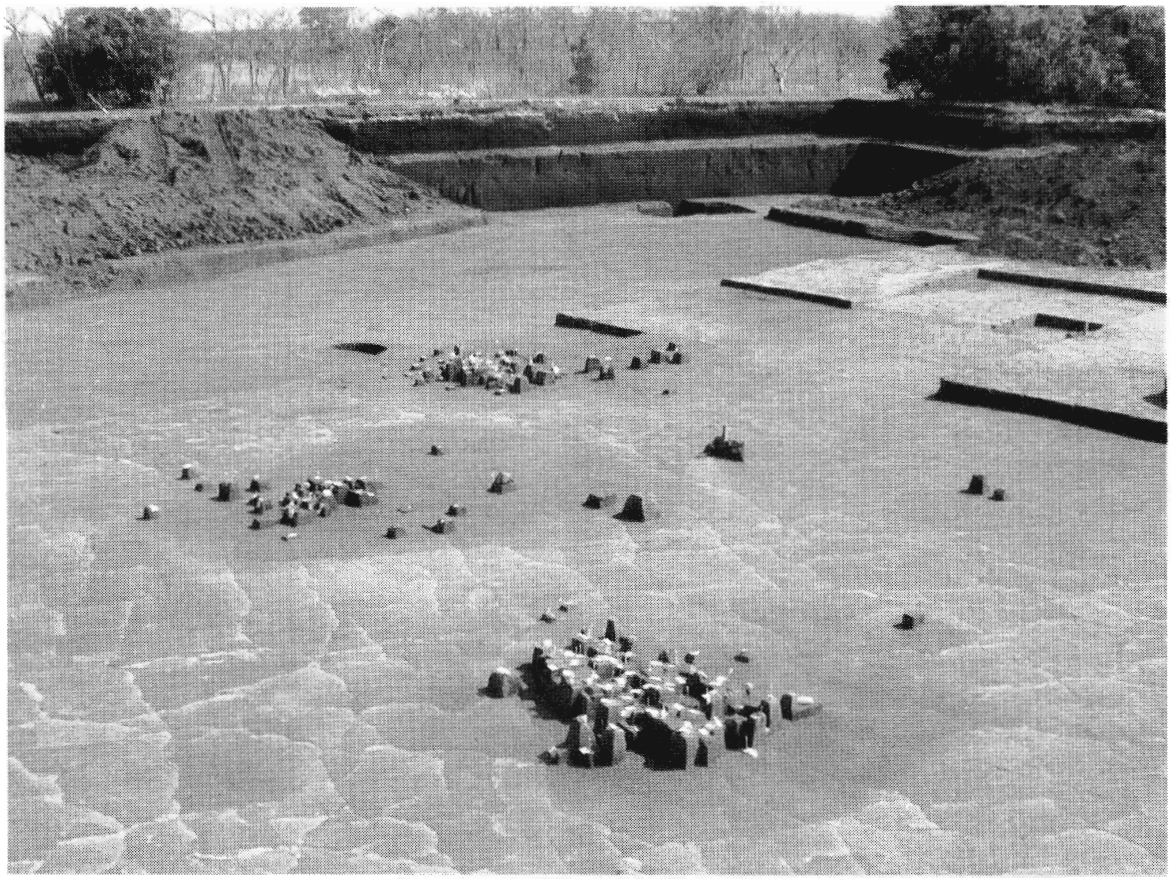
SK09 断面



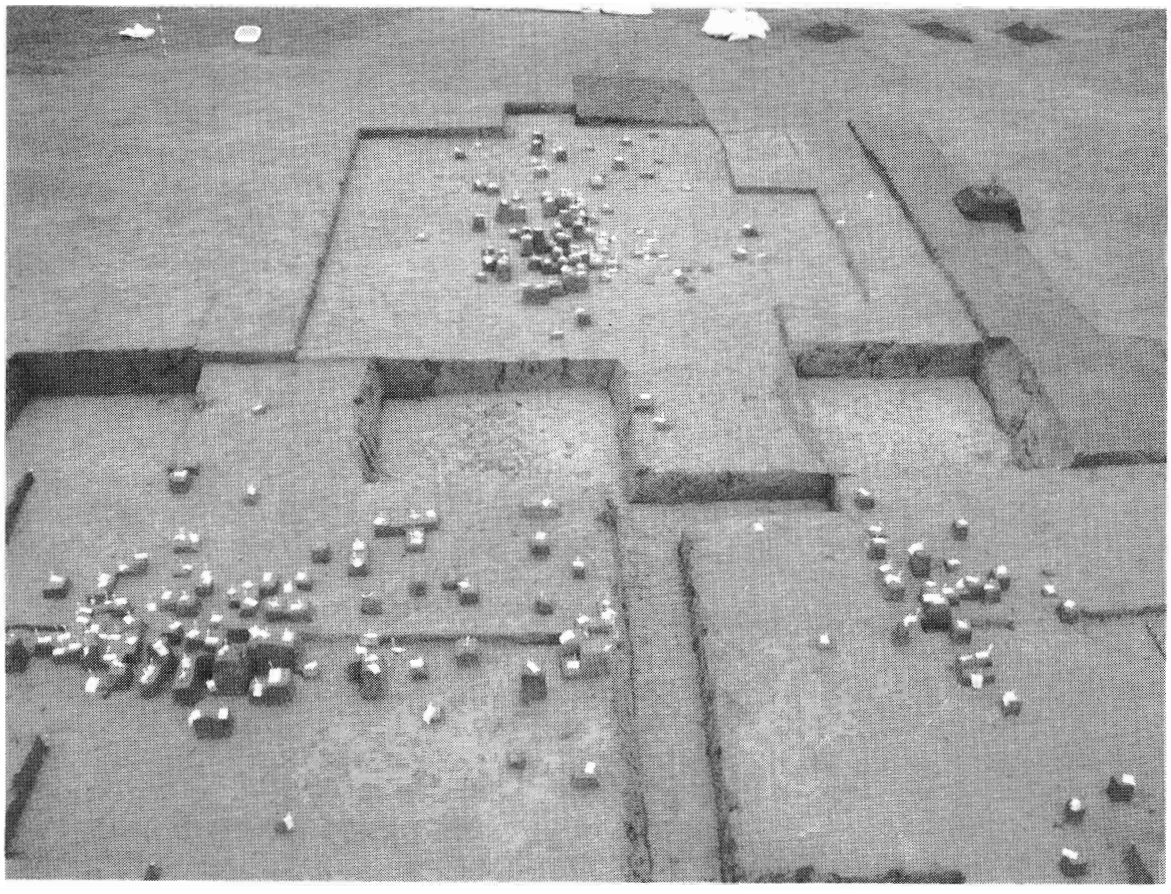
SK02 完掘状態



土坑群検出状況（手前から SK05･06･07･08）



石器ブロック検出状況（手前から SX10･SX11･SX12）



石器ブロック検出状況（手前右：SX02、手前左：SX04、奥：SX04）

藤沢市 №211遺跡

― 旧石器時代の石器石材採取・選別地 ―

桜井　準也・松山敬一朗・鈴木　啓介・中川　真人

所 在 地　藤沢市大庭5224－6他

調査機関　藤沢市№211遺跡発掘調査団

調査担当　田代郁夫・松山敬一朗

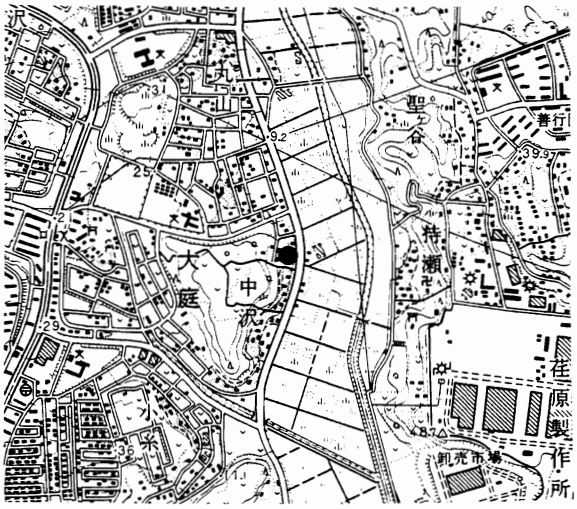
調査目的　宅地開発に伴う事前調査

調査期間

１次調査：2000年７月10日～９月８日

２次調査：2000年11月16日～2001年２月３日

調査面積　１次調査約200㎡、２次調査約100㎡



第１図　遺跡位置図〔1/25,000〕

１．遺跡の立地

本遺跡は藤沢市南部に位置する大庭地区の大庭城跡東側に所在し、大和市を水源とする引地川右岸の立川面に立地する(第１図)。遺跡の標高は10m前後である。遺跡背後の相模野台地には藤沢砂泥互層(約50万年前)を不整合に覆う相模野礫層(10～７万年前)に武蔵野ローム層(７～3.5万年前)・立川ローム層(3.5～1.2万年前)・完新世層(1.2万年前～)が堆積している。遺跡付近では降下テフラY-128降下頃(約２万年前)に、引地川の蛇行によって相模野台地が侵食を受け、急崖となっていた部分で崩壊が発生し、相模野礫層の礫やテフラが氾濫原に堆積した。その後、引地川が河道が東に移動し、低段丘となった地点に本遺跡が形成されている(註１)。

２．調査経緯

調査は藤沢市住宅公団の委託により藤沢市№211遺跡発掘調査団が行った。1次調査は平成12年(2000)７月10日から予備調査(トレンチ調査)が開始され、７月末の段階で縄文時代以降の予備・確認調査をほぼ終了した。その後、ローム層の堆積を確認したため引き続いて旧石器時代の遺構及び遺物の有無の確認するため２×２ｍの試掘坑を７ヵ所設定し、掘削を行った。その結果、１ヵ所から礫十数点が出土した。この礫の平面分布は、試掘坑外にさらに広がりを持つと推定されたため、調査区を拡張した。その後、礫集中部はさらに北西側に展開したため、再拡張を行ない、礫集中部が北東一南西方向に堤状に延びる崩落礫層に達すること、崩落礫層に落ち込みが存在することを確認して９月８日に１次調査を終了した。同年11月16日より旧石器時代の石器石材採集・選別遺構と想定される礫集

中部の調査を目的として２次調査が行われた。調査は礫集中部の長軸に沿ってベルトを残す形で行われ、礫集中部(第１・２面)の下に崩落礫層が流出したと思われる礫層(第３面)を確認した。また、３面よりナイフ形石器や剥片などの石器類が出土した。最終的にベルトを撤去し、２次調査は平成13年(2001)２月３日に終了した。

３．調査概要

中近世

１次調査により中世の段切り状遺構及びピット14基、近世の地下式室状遺構１基、井戸１基、ピット１基が確認された。

古墳時代

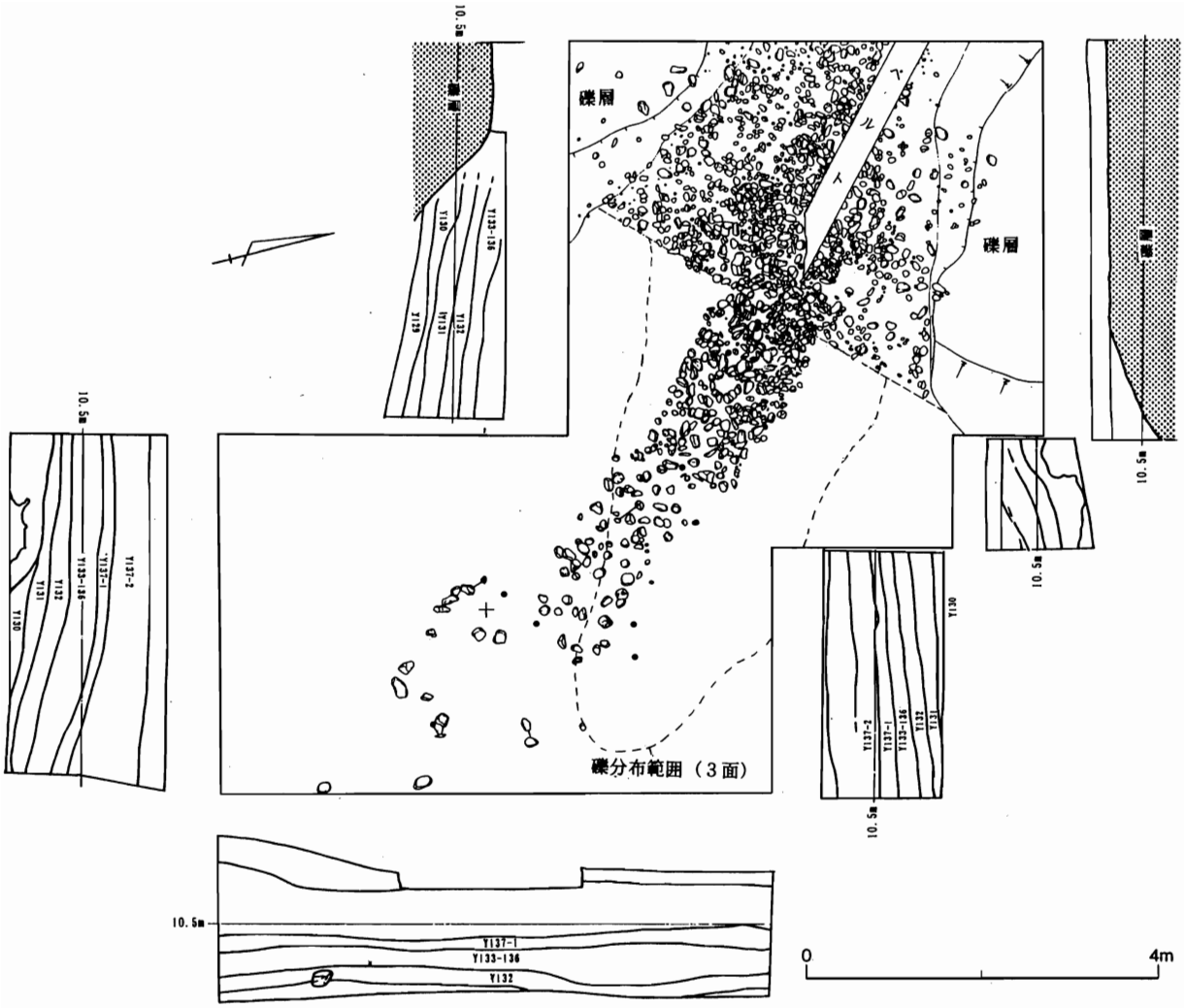
１次調査により古墳時代前期の竪穴住居址が１軒検出された。

縄文時代

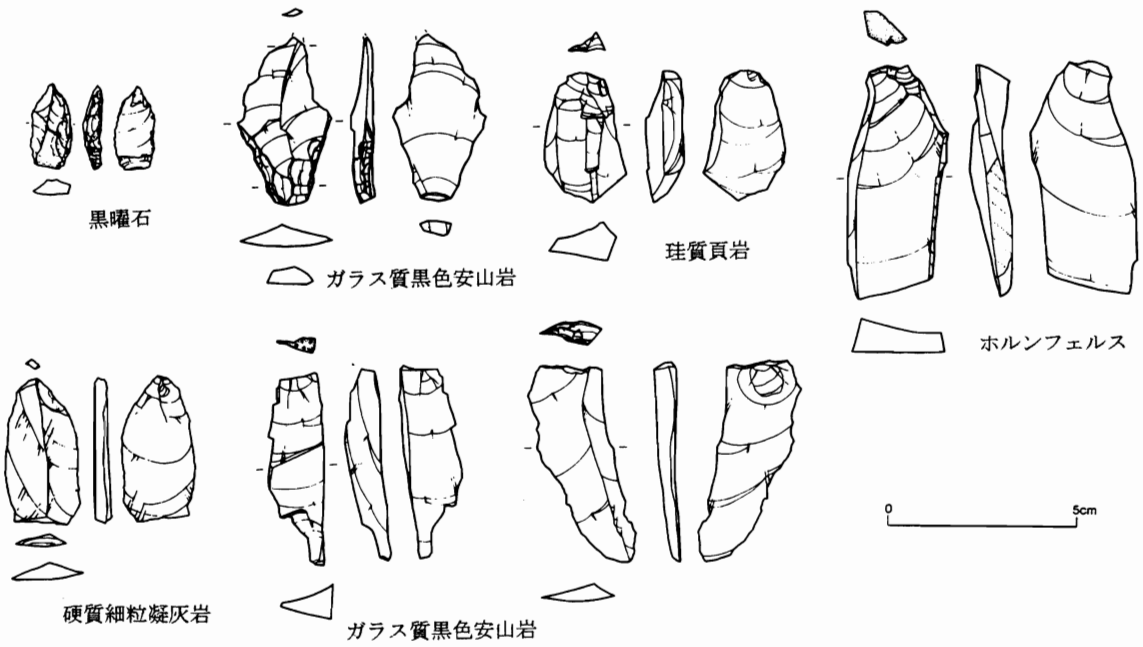
１次調査の結果、遺構は検出されなかったが、包含層中より縄文土器(前期)や石器・礫等が出土した。

旧石器時代

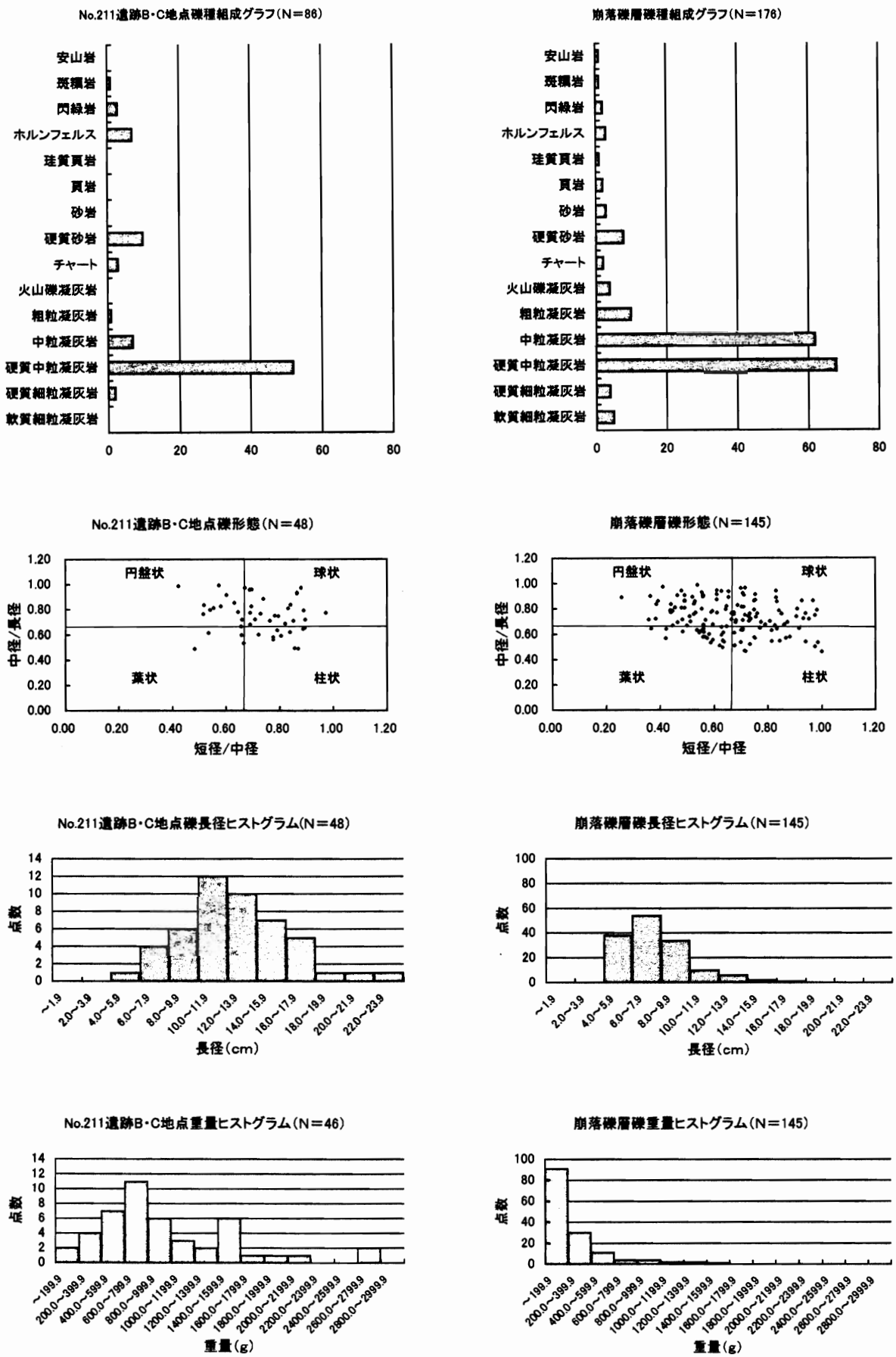
検出された礫集中部の検出層序はY-129～132、つまり立川ロームＬ２層上部(約19,000年前)にあたる。この時期の石器群は相模野第Ⅳ期前半(鈴木・矢島1976)、諏訪間編年の段階Ⅵ(諏訪間1988)にあたり、ナイフ形石器や尖頭器、剥片剥離技術では「砂川型刃器技法」を特徴とする段階で硬質凝灰岩やチャートなど在地系石材が多用される時期にあたる。本遺跡は次のような過程で形成されたと推定される(註２)。まず、遺跡が形成される以前(Y-128降下前後：約２万年前)に台地斜面崩壊時に崩落した相模野礫層に由来するものと考えられる崩壊礫層が相模野台地に沿って堤状に形成される。この崩落の原因は引地川の侵食によって急崖となった斜面が降雨または地震によって地滑り状の崩壊を起こしたものと思われる。なお、Y-129降下期頃は相模川本流でも古富士泥流が複数回発生しており、多雨期であったと考えられている(上杉他1992)。その後、自然営力よって崩落礫層の一部が南東(引地川)方向に崩れ出し、崩落礫層に長さ約7.5m、最大幅約6.5mの落ち込みが形成される。その時流出したと思われる礫(第３面：Y-129･130頃)が引地川方向に長さ5.3m、最大幅3.2mの規模で分布している(第２図)。この中には礫層が再堆積したと思われる部分もみられ、先端にいくほど礫径が小さいものが目立ち、破砕礫が多くなる。これらの礫に混じってナイフ形石器や二次加工剥片、剥片などの石器が出土している。その後、フラッドローム(湿地など水分の多い場所に堆積したテフラ)が若干堆積し遺跡が完全に離水した後、礫集中部が形成された(第１・２面：Y-130～132頃)。礫集中部は崩落礫層から南南東方向に帯状に約7.3m延びている(第２図)。この面の礫の平面分布状況を観察すると、崩落礫層の落ち込み部分に接し、南南東側の緩斜面に長さ約２m、幅約1.4mの帯状に礫が密集して分布する地点(Ａ地点)、その南東側の緩斜面に長さ約２m、幅約１mの帯状に礫が分布する地点(Ｂ地点)、さらにその南側の平坦面に径約２mの環状に大形礫が分布する地点(Ｃ地点)に区分できる。これらの礫集中部、特にＢ・Ｃ地点については自然営力によるものではなく人為的に形成されたものであると考えられる。その理由は次の通りである。まず、この時期にはこの地点は完全に離水しており、第３面で検出された崩落礫層から流出したと推定される礫とは異なり、全面に鉄分の付着した礫や小礫、砂質土がまったく含まれていない。次に、礫集中部において認められる礫のサイズが最大長15cm程度の大きさに集中しており、礫種



第2図　礫集中部検出状況〔1/80〕



第3図　出土石器〔1/2〕


No.211遺跡B・C地点礫種組成グラフ(N=86)
崩落礫層礫種組成グラフ(N=176)
安山岩
斑糲岩
閃緑岩
ホルンフェルス
珪質頁岩
頁岩
砂岩
硬質砂岩
チャート
火山礫凝灰岩
粗粒凝灰岩
中粒凝灰岩
硬質中粒凝灰岩
硬質細粒凝灰岩
軟質細粒凝灰岩
0
20
40
60
80
No.211遺跡B・C地点礫形態(N=48)
崩落礫層礫形態(N=145)
円盤状
球状
葉状
柱状
中径/長径
短径/中径
0.00
0.20
0.40
0.60
0.80
1.00
1.20
No.211遺跡B・C地点礫長径ヒストグラム(N=48)
崩落礫層礫長径ヒストグラム(N=145)
点数
長径(cm)
~1.9
2.0~3.9
4.0~5.9
6.0~7.9
8.0~9.9
10.0~11.9
12.0~13.9
14.0~15.9
16.0~17.9
18.0~19.9
20.0~21.9
22.0~23.9
No.211遺跡B・C地点重量ヒストグラム(N=46)
崩落礫層礫重量ヒストグラム(N=145)
重量(g)
~199.9
200.0~399.9
400.0~599.9
600.0~799.9
800.0~999.9
1000.0~1199.9
1200.0~1399.9
1400.0~1599.9
1600.0~1799.9
1800.0~1999.9
2000.0~2199.9
2200.0~2399.9
2400.0~2599.9
2600.0~2799.9
2800.0~2999.9

第4図　礫の分析結果

も中粒凝灰岩をはじめ石器石材に向かない種類が少なく、硬質中粒凝灰岩・硬質砂岩・ホルンフェルス・チャートなど、この時期に用いられる石器石材の割合が高くなっている。さらに、Ｂ・Ｃ両地点では人為的に打ち割られた加工礫や礫の接合資料が認められる。以上の理由から本遺構は崩落礫層から石器石材を採集・選別した跡であると推定され、Ａ・Ｂ地点は崩落礫層から採集した礫の集積の場、Ｃ地点は礫の選別の場であったと解釈される。ただし、Ａ地点の崩落礫層側は礫の密度が高く、比較的小形の礫も目立つことから礫層から崩落した礫も多く含まれている可能性がある。

本遺跡からは、遺物の主体を占める約2500点の礫や加工礫(第１・２面)の他に、第３面からナイフ形石器1点、二次加工剥片1点・剥片類7点、加工礫が出土している(第３図)。石器の使用石材は黒曜石・ガラス質黒色安山岩・硬質細粒凝灰岩・硬質中粒凝灰岩・珪質頁岩・チャート・ホルンフェルスと多様であり、接合資料や同一個体資料は存在しない。その他に現時点で第１～３面からハンマーストーンと考えられる資料が5点程度、接合資料を含む人為的割られた可能性の高い加工礫が約30点程出土している。本遺跡では剥片剥離作業は行われておらず、人為的に割られた礫は石材の質を確認するために試し割りを行ったと推定される。人為的に打ち割られた接合資料を検討すると、節理面を意識しながら大形で重量のあるハンマーを使用していたと考えられる。なお、良質で石核に適した形状の礫は、試し割りは行わずそのまま持ち出された可能性が高い。

次に、本礫集中部は崩落礫層が流出したものではなく、人為的に選択されたものであることを確認するため、礫集中部Ｂ・Ｃ地点の第１面の礫とサンプリングした崩落礫層の礫(ともに最大長５cm以上)を比較した(第４図)。その結果、礫種構成(註３)をみるとＢ・Ｃ地点の礫は中粒凝灰岩が極端に少なく、同様に石器石材に向かない軟質細粒凝灰岩・粗粒凝灰岩・火山礫凝灰岩が少ない。これに対し、硬質中粒凝灰岩・硬質砂岩・ホルンフェルス・チャートなど、この時期に頻繁に用いられる石器石材の割合が高くなっている。次に、礫の形状はＢ・Ｃ地点では石核に向かない円盤状や葉状の礫が少ないことがわかる。礫の大きさは、Ｂ・Ｃ地点が長径10～14cm、重量600～800gに集中するのに対し、崩落礫層の礫が長径６～８cm、重量200g未満に集中しており、明かに大きさが異なっている。これらの礫の分析データは礫集中部を構成する礫が人為的に選択されたものである可能性が高いことを示している。

以上のように、本遺跡は崩落礫層の上部が流出することによって礫層の中位に存在する良質の大形礫が平面的に露出し採集が容易になった礫層から石器の素材となる礫を採集・選別を行なった場であると推定される。礫の堆積状況をみると、採集活動は一回だけではなく複数回行われたと思われる。しかし、遺跡の規模や遺物の出土量等から考えて、本遺跡は組織的に石材を採集した大がかりな石材採集場というよりも、引地川沿いの移動ルートにあたっていた地点に露出していた崩落礫層から石材の不足状況に応じて石器の素材となる礫を採集・補充する場であったと推定される。なお、第１・２面と第３面では遺跡の状況や出土遺物が異なり、性格の違いが想定できるがこの点は今後の課題である。

註

(1)～(3)神奈川県立七里ガ浜高校の上本進二氏の御教示・鑑定による。

文献

上杉陽・米澤宏・宮地達朗・肥田木守・細田一仁・米澤まどか・由井将雄　1992「富士系火山泥流のテフラ層位」『関東の四紀』17号

上本進二・上杉陽・由井将雄・米澤宏・中村喜代重　1994「南関東の立川ローム層と考古学土層」『神奈川考古』30号

神奈川県考古学会　2001『相模野旧石器編年の到達点』

桜井準也・松山敬一朗・鈴木啓介　2001「神奈川県藤沢市№211遺跡における後期旧石器時代の石器石材採集活動について」『日本考古学協会第67回総会研究発表要旨』

鈴木次郎・矢島國雄　1976「相模野台地における先土器時代研究の現状」『神奈川考古』1号

諏訪間　順　1988　「相模野台地における先土器時代石器群について」『神奈川考古』24号

渡辺丈彦　1995「お仲間林遺跡における頁岩の入手と利用」阿部祥人他編『お仲間林の研究』慶應義塾大学民族学・考古学研究室

横浜市南区 稲荷山（いなりやま）貝塚

― 縄文時代後期の貝塚と集落 ―

松田　光太郎

所 在 地　横浜市南区山谷56他

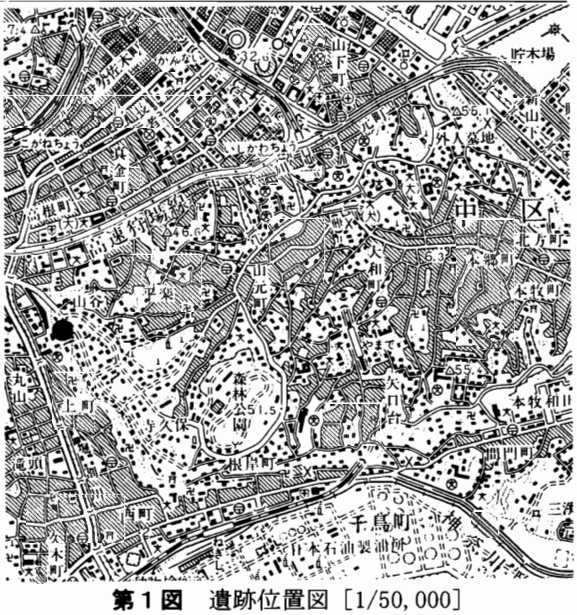
調査機関　財団法人　かながわ考古学財団

調査担当　岩田直樹・大塚健一・恩田　勇・木村吉行・鈴木庸一郎・松田光太郎　宮坂淳一

調査目的　根岸米軍（11）法面整備工事に伴う埋蔵文化財の事前調査

調査期間　2000年４月18日～７月31日

調査面積　880㎡



第１図　遺跡位置図［1/50,000］

１．遺跡の立地

本貝塚は横浜駅から南へ約4.2km、本牧岬から西へのびる標高約50～55mほどの台地上にある（第１図）。この台地は地質的には下末吉台地にあたり、北を大岡川流域の沖積低地、東と南を東京湾、西を堀割川により画されているが、堀割川は江戸時代の開削によるもので、本来は三殿台遺跡のある西方の台地と連続していたものと考えられる。周辺には縄文時代の貝塚が多く、縄文時代前期の平台貝塚、中期の元町貝塚、山手貝塚、後期の池ノ台貝塚などがある。

本台地は河川浸食による深い谷が刻まれており、現在遺跡の南西側は比高差40m程の急崖となって、堀割川に面している。しかし遺跡は東側からのびる千代崎川水系の支谷に面する斜面に形成されたものと考えられる。

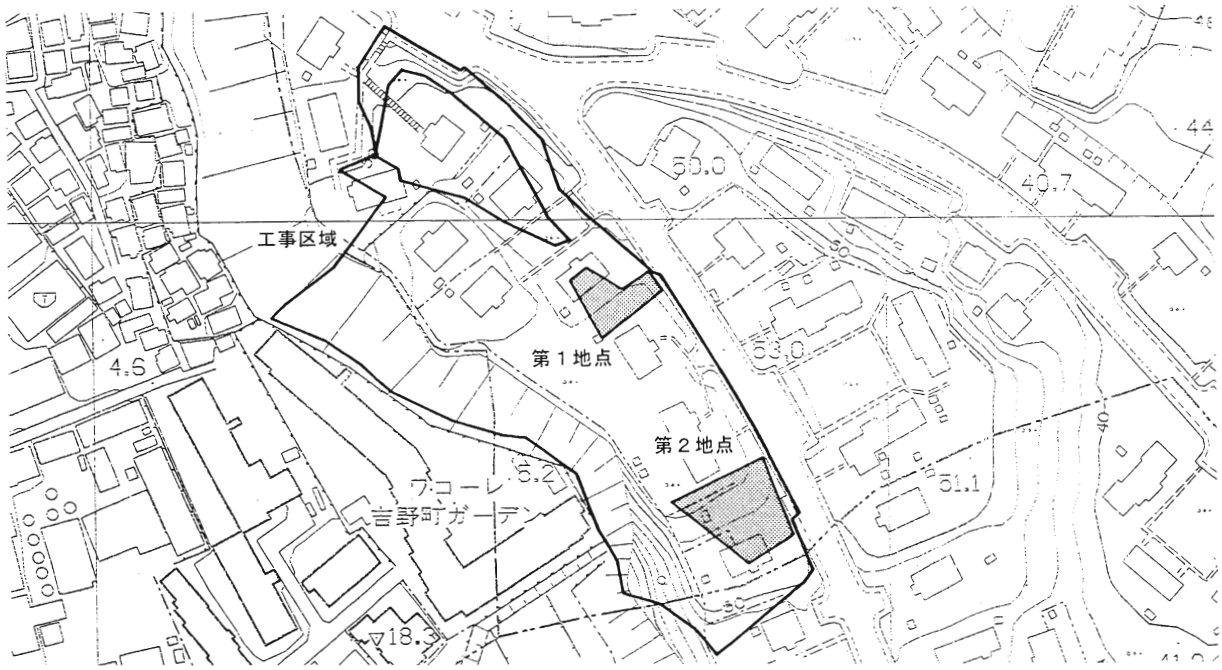
２．調査経緯

本貝塚は戦前より知られており、1930年に５ヶ所の貝塚の存在が確認され、そのうち２ヶ所が行われている（池田他1935）。

戦後は根岸米軍住宅地内となり、貝塚は住宅建設時の造成で壊滅したものと考えられていた。

しかし1999年に発生した米軍住宅隣接崖地崩落事故に対する横浜防衛施設局による崖面整備工事中の2000年４月、貝塚が発見された（第１地点）。工事計画変更等による現状保存は難しいことから、４月18日より（財）かながわ考古学財団が発掘調査に着手することになった。また調査開始後、新たに別の貝塚が見つかったため、第２地点として平行して調査を行い、７月31日に調査を終了した。調査面積は第１地点287㎡、第２地点593㎡、合計880㎡である。

今回発掘した２ヶ所の貝塚は規模が大きいことから、1935年時の５ヶ所の貝塚のうちの２ヶ所である可能性があるが、当時の貝塚と今回の貝塚の位置関係は明らかでない。



第２図　調査区位置図〔1/3,000〕

３．調査概要

第１地点と第２地点は約50m程離れている（第２図）。両者の間は削平されていたが、本来は平坦な台地が存在したと思われ、第１地点はその北側、第２地点は南側の斜面に位置する。

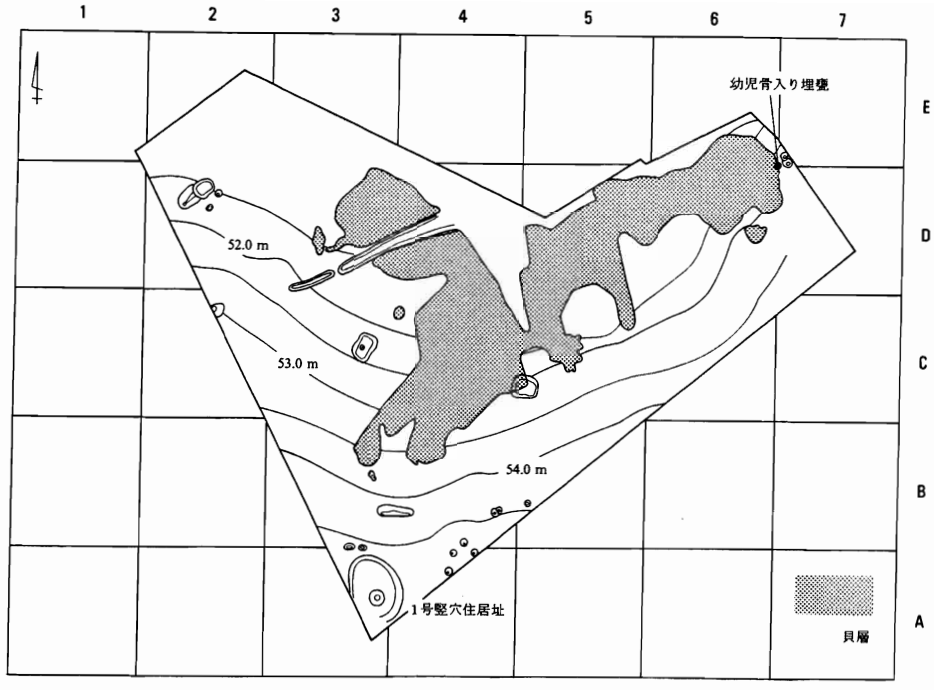
層位は上から表土、黒褐色土、暗褐色土、ローム土となり、暗褐色土上位に貝層が存在する。黒褐色土下位から縄文時代後期の加曽利Ｂ１式土器が出土し、暗褐色土の上位および貝層から堀之内１・２式土器、暗褐色土の中位以下からは縄文時代草創期～前期の土器が出土した。

第１地点（第３図）

貝層は調査区中央から北へ向かう埋没谷を中心にして形成されていた。貝層は約20m×10mの範囲に分布していたが、北半分は段切や近世の溝、撹乱によって消失していた。貝層の厚さは最大で約110cm、平均約70cm程であった。貝層の下半は貝殻の密集層（純貝層～混土貝層）と間層（混土貝層～土層）の互層、上半は貝殻密集層からなる（写真１）。時期は上部の貝層が堀之内２式期、他の大半は堀之内１式期に属する。

遺構としては住居址、土坑、焼土址、ピットなどが検出された。住居址は貝層より斜面上位にあたる調査区南西部で2.8m×2.1mの小形不整円形をなす竪穴住居址が１軒検出された。時

写真１　稲荷山貝塚第１地点　貝層断面



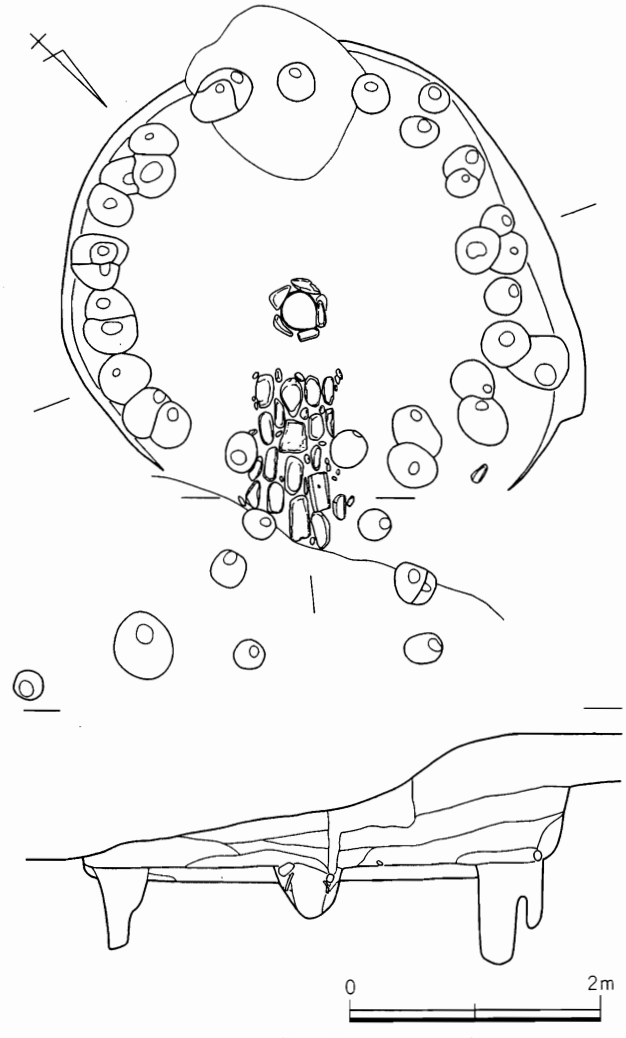
第３図　稲荷山貝塚第１地点　遺構配置図〔1/300〕

期は堀之内１式期。また貝層東端で深鉢形土器（堀之内１式）に入った幼児骨１体が出土した。この他珍しいものとしては巻貝（アカニシ）が５個入った伏甕（堀之内１式）が出土した。

第２地点（第５図）

貝層は調査区中央から南東に向かう埋没谷を中心に存在していた。貝層の分布は東側の大きなブロックと西側の中小の貝層ブロック群に分けられる。東側のブロックは平均層厚が約110cm、最大層厚が130cm、西側のブロックは平均層厚が約50cm、最大層厚が90cmで、西側のブロックは東側のブロックの下半分に相当することが捉えられた。時期は上層が堀之内２式期、以下順次堀之内１式期に移行する事が伺われた。

遺構としては住居址、土坑、焼土址、ピットなどが存在した。住居址は埋没谷南西の一群と北東の一群に分けられる。南西の一群は敷石住居址１軒、竪穴住居址１軒からなり、時期は共に堀之内１式期。敷石住居址（１号敷石住居址）は4.0m×3.6mの小形不整円形をなし、中央には石囲炉、炉から張出部にかけて敷石が存在した（第４図）。また竪穴住居址（３号竪穴住居



第４図　１号敷石住居址〔1/60〕

第5図　稲荷山貝塚第2地点　遺構配置図（1/300）

址）は1号敷石住居址よりも古いもので、径約6.2×6.0mの円形に柱穴が巡っていた。北東の一群も敷石住居址・竪穴住居址各1軒からなるが、時期は共に堀之内2式期。敷石住居址（2号敷石住居址）は床の硬化面や掘り込みは検出できなかったが、石囲炉と張出部の敷石が認められ、付近には小礫や焼土の集中がみられた。竪穴住居址（2号住居址）は一辺6.5m程の隅丸方形のプランをもつものである。また貝層の周縁から成人と幼児の埋葬人骨が出土した。成人骨は伸展葬（写真1）、幼

写真2　稲荷山貝塚第2地点　人骨出土状況

写真３　稲荷山貝塚第２地点　幼児骨出土状況

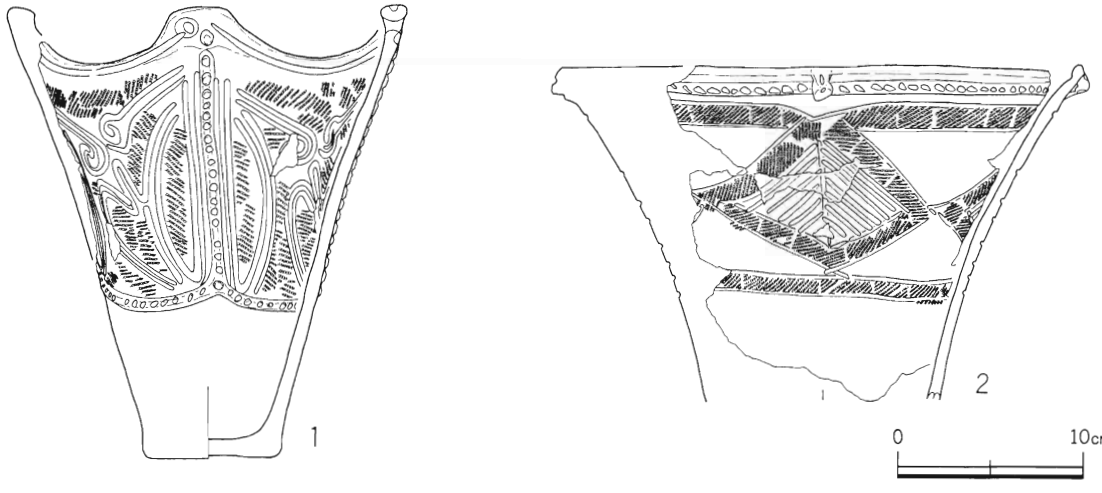
石皿、磨石、石錘、浮子などがあり、土製品では土偶、土器片錘などが出土した。骨角貝器は銛（第７図１）、ヤス（同図２）、骨鏃、釣針（同図３・４）、貝刃、貝輪、垂飾品などが出土した他、貝輪の未製品や加工痕のある鹿角なども発見された。

自然遺物としては貝類、獣魚骨などがある。貝類ではハマグリ・アサリ・シオフキ・イボキサゴが多く、ハイガイ・サルボウ・オキシジミ・カガミガイ・オオノガイ・マテガイ・バカガイ・カリガネエガイ・マガキ・イタボガキ・イタヤガイ・アカニシ・ツメタガイ・バイガイ・イボニシ・アラムシロガイ・ウミニナ・イボウミニナ・スガイ・オオヘビガイ・キセルガイなどがある。獣骨ではイノシシ・シカ・イルカ類が主体で、他にイヌ・ニホンザル・タヌキ・鳥類・クジラ類などがある。魚骨は小型魚骨が多く、クロダイ・スズキ・コチ・エイ・アナゴ・ホウボウ科・マダイ・フサカサゴ科・コショウダイ・カツオ・アジ類・イワシ類などが出土している。

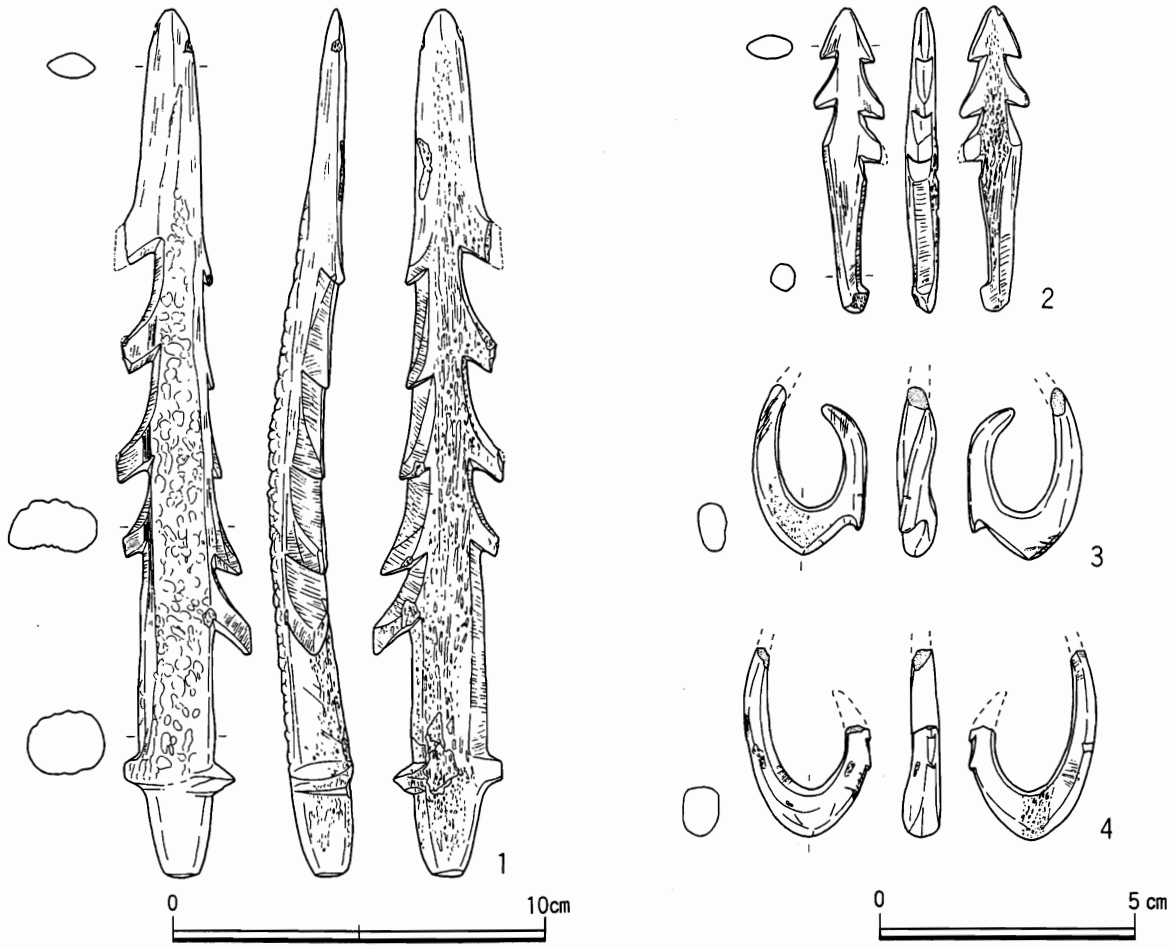
児骨は甕棺葬（写真２）である。時期は共に堀之内１式期である。この他珍しいものとしては犬の埋葬や赤色顔料が充満した土器などが出土した。

出土遺物

遺物では縄文土器、石器、骨角貝器、土製品などが出土した。土器は縄文時代草創期の撚糸文土器、早期の野島式土器、前期の花積下層式・黒浜式・諸磯式土器、中期の勝坂式・加曽利Ｅ式土器、後期の称名寺式・堀之内１・２式・加曽利Ｂ１式土器などが出土した。主体は堀之内１・２式土器である（第６図）。石器では石鏃、打製石斧、磨製石斧、礫器、石匙、凹石、



第６図　稲荷山貝塚出土縄文土器〔1/4〕



第７図　稲荷山貝塚出土骨角器〔1･2:1/2,3･4:2/3〕

４．まとめ

稲荷山貝塚は縄文時代後期前半に形成された斜面貝塚である。貝塚は台地際の緩やかな斜面に形成され、斜面のやや高い所から台地中央部は居住域となっていたと推測される。斜面は貝層だけでなく土器捨て場としても利用され、特に第２地点では堀之内１・２式土器が多量に出土した。また人の埋葬遺構（堀之内１式期）が貝層の周縁から発見され、貝層周縁が墓域として使われていたことが明らかになった。

生業について見ると、貝層からシカ・イノシシなどの獣骨の他、クロダイ・スズキなど湾内にすむ魚類の骨が多く出土した。また貝類もハマグリやアサリなど内湾に棲む貝類が主であったため、狩猟の他に遺跡近傍の内湾での魚類の捕獲、貝類の採集がさかんに行われていたと思われる。しかし同時にイルカやクジラなどの外洋に棲む海獣骨も多く出土しており、鹿角製銛による刺突漁（金子他1958）の存在が想定されよう。この海獣骨の多量出土と銛の存在は横浜市称名寺貝塚や千葉県鉈切洞窟など東京湾口に近い同時期の貝塚・遺跡でも見られる傾向で、今回の調査により本貝塚における多様な漁労活動の実態が明らかになったと言えよう

文献

池田健夫他1935「神奈川県横浜市中区中村町稲荷山貝塚発掘調査概報」『史前学雑誌』7-1

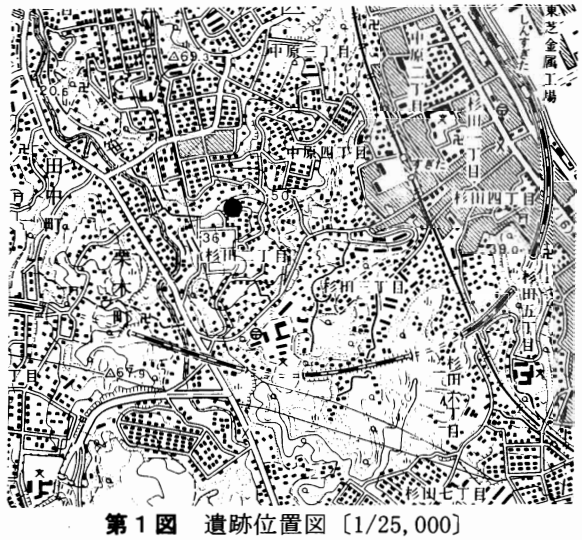
金子浩昌他1958『館山市鉈切洞窟の考古学的調査』

横浜市磯子区 杉田貝塚

― 縄文時代中期～晩期にわたる貝層 ―

山田　仁和

所 在 地　横浜市磯子区杉田２丁目1620番
調査機関　杉田貝塚発掘調査団
調査担当　山田仁和
調査目的　宅地造成に伴う事前調査
調査期間　2001年３月10日～４月22日
調査面積　60㎡



第１図　遺跡位置図〔1/25,000〕

１．遺跡の立地

杉田貝塚は、横浜市南部の多摩丘陵上に位置する。同地域は、三浦半島の付け根にあたり、北から南にかけて徐々に高度を増す。遺跡をのせる台地は標高52～55mで、東側は東京湾に面し、西側は大岡川に注ぐ笹下川により南北にのびる谷に画され、さらに、これに向かって開析谷が複雑に発達している。遺跡をのせる台地は極めて急峻な独立丘状を呈し、貝層はこの台地の縁辺部から斜面部にかけて形成されている。

本遺跡の周辺には、縄文時代後期～晩期の遺跡としては1949年および1962年に調査された桂台遺跡(杉原ほか1963)がある。本遺跡同様、狭い丘陵上にのこされた遺跡であり距離的にも近接する。北方約１kmに所在する屏風ヶ浦森町貝塚(西村1949)は南北にのびた丘陵の東側斜面に立地し、縄文時代後期前葉から後葉の貝層および包含層が検出された。

なお、1963年報告の「杉田遺跡」(杉原ほか1963)は今回の調査地点の南約40mに位置する。貝層分布の尽きる部分の台地中央平坦部が調査され縄文時代晩期中葉～後葉の土器片が出土し、これらは南西関東における晩期土器編年の指標となっている。

２．調査経緯

今回の調査は、宅地造成に伴う事前記録調査である。横浜市教育委員会では開発計画に基づく現地確認調査依頼をうけ、平成12年９月28日、現地踏査を実施した。それにより、当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地内であり貝の散布の認められることを確認し、平成12年12月５日に試掘確認調査を行った。この調査によって台地縁辺部に層厚１m以上の貝層が遺存し、台地上には一部、遺物包含層が残ることが明らかとなった。この結果をうけて本調査対象範囲は、盛土工法を採る台地上部を除き、地下に影響を与えると考えられる台地縁辺部の擁壁建設部分とした。本調査は平成13年３月10日から開始し、表土除去後、貝層の平面的な広がりを確認した。貝層の分布範囲に対して堆積状況把握のため、斜面

の傾斜方向にトレンチを３ヶ所(中央および東西)設定し掘り下げ、基本的な層序を作成した。これにもとづいて、貝層を層位毎に平面的に調査した。平成13年４月22日に現地での調査を終了した。

３．調査概要

杉田貝塚は、過去数回にわたって調査が行われ貝層の分布範囲が推定されている(吉崎1950、西村1956、杉原ほか1963)。今回の調査地は以前は畑地として利用されていたが、この周辺の狭い範囲以外は住宅が建ち並び、現状では貝層の全体的な広がりは観察できない。かつて貝層は台地平坦部を取り囲むように分布し、南西部から北東部の台地縁辺部および南東部の一部に広がり、南北約70m、東西約45mの規模をもつものであったとされている(杉原ほか1963)。これまでの調査により、貝層は台地斜面部に形成され縄文時代後期を主体とし、貝層分布の途切れた台地平坦部に晩期後半期の包含層が堆積することが確認されている。後者は「杉田遺跡」として報告されている。今回の調査地点は、貝層分布の北端部付近に位置する。

貝層の堆積

調査は造成工事の影響のおよぶ範囲に限定したため現地表面下約２mまでとした。しかし貝層はさらに下層まで堆積することが予想されたため、堆積状態確認を目的としてサブトレンチを設定し黄褐色を呈する砂質の地山層まで現地表面から約４m掘り下げた。貝層の平面的な広がりは調査区全体(東西約18m、南北約４m、中央部トレンチでは南北約7.5m)で認められ、さらに台地斜面下方および上方、東西方向に延びていることが推定される。土層の堆積状態は厚20～40cmの表土下、縄文土器を少量包含する厚30～70cmの暗褐色土が斜面下方にかけて厚みを増しながら堆積する。この土層以下、貝層および土層(間層)を次のように統合、整理し基本土層を作成した。(第２図)

上層：ハマグリを主体とした混土貝層と貝をほとんど含まない褐色土を主体とした土層が互層で堆積する。褐色土層は厚10～20cm、長１～1.5mのレンズ状に認められる。層厚40～70cm。縄文時代後期末～晩期初頭(安行１式、２式、３ａ式)の土器が出土する。

中層：ハマグリを主体とした混土貝層群。灰、炭化物が多量に含まれる。層厚50～70cm。縄文時代後期中葉～後葉(加曽利Ｂ２式、Ｂ３式、曽谷式)の土器が出土する。

下層：マテガイ＋ハマグリの純貝層、ハマグリを主体とした混土貝層が堆積する。マテガイの集中的な堆積を特徴とする。層厚70～80cm。縄文時代後期後葉(堀之内２式、加曽利Ｂ１式)の土器が検出される。

下層以下：平面的に調査を行った部分で最下層の貝類をほとんど含まない褐色土主体とした土層以下、サブトレンチ部で確認した地山面までの層を説明の便宜上、一括する。現地での観察では下層になるほど貝類の混入が減少するようにみられた。層厚200～240cm。縄文時代中期後葉～後期前葉(加曽利Ｅ３式、Ｅ４式、称名寺Ⅰ式、Ⅱ式、堀之内２式)の土器が出土。

人工遺物

整理箱25箱分の遺物が出土した。土器は縄文時代中期後葉から晩期初頭(加曽利Ｅ３式～安行３a式)のものが連綿と層位的に検出された。量的には後期中葉から後葉のものが多く器形復元可能な大形の破片が目立つ。晩期初頭の土器はわずかに検出されたのみであり、また晩期中葉に下るものは出土していない。石器は、石鏃、磨石、石皿、打製石斧、石棒、ヒスイ小玉が出土している。土製品には土器片錘、土偶、石棒形土製品があり、骨角器としては、鹿角製釣針、

銛、ヤス、骨針、垂飾品、ヘアピン等が出土した。垂飾品は縦に割られた鹿角を素材としたもので、全体は菱形を呈し全面赤色塗彩されている。中央には菱形の孔が穿たれており、上下には貫通孔を有する。後期末葉の層位から出土した。類例が仙台湾周辺を中心とした地域から出土している(稲野1989)。貝製品は貝輪(アカガイ、アカニシ)、貝刃が検出されている。

自然遺物

獣骨が整理箱30箱分と多量に出土した。量的には、シカ、イノシシが圧倒的に多く、キツネ、ニホンザル、アシカ、ウミガメ、鳥類が少量検出されている。上層からの出土が目立つ。検出された魚骨は量的には多くないが多様である。基本層序の中層以下から多く出土した。種類とは内湾性のものとしては、クロダイ、スズキ、コチ、岩礁性のものは、マダイ、コブダイ、イシダイ、コショウダイ、回遊性のものとして、カツオ、ブリ、アジ、サバがある。貝類は、ハマグリが最も多く、アサリ、シオフキ、ツメタガイが混じる。また、基本層序の中層にはマテガイを集中的に含む厚10～15cmの層が４～５層認められる。マテガイを選択的に多量に採集した時期が存在したものと推定される。

また、成人の右下顎骨１点も出土した。埋葬等の状況は認められなかった。

４．まとめ

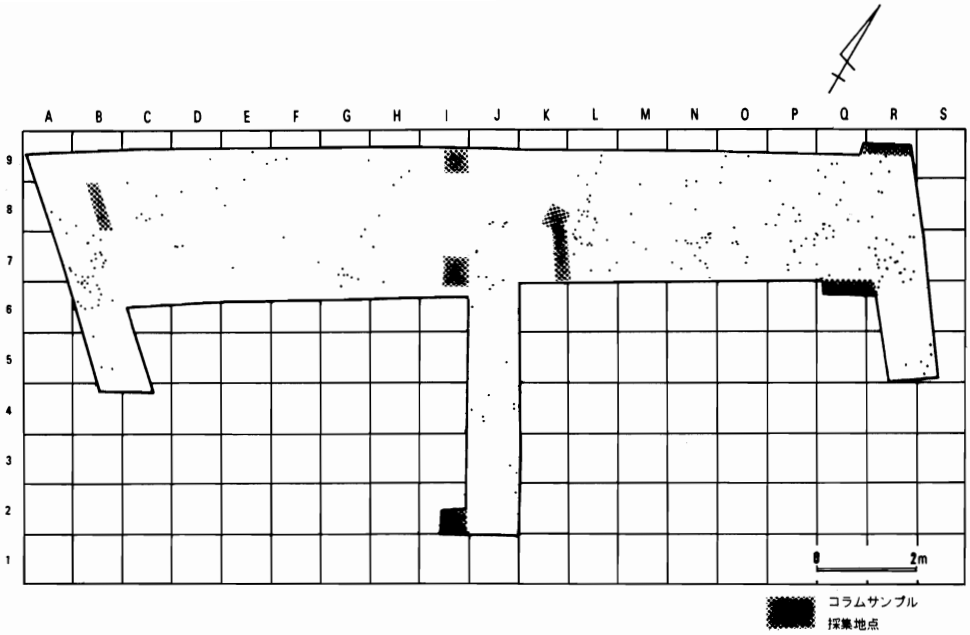
今回の調査では、縄文時代中期後葉から晩期初頭にわたる遺存状況の極めて良好な貝層が確認された。最大で厚さ約４mをはかる。貝層は台地斜面上部から形成され始め、時間を経るに従って斜面部を埋め立てながらより下方に前進しながら残されている。また、貝層間に認められる貝類を少量のみ含む褐色土層(間層)は、台地上部からの崩落流入といった自然堆積とは考え難く、人為的な地山面の掘削により発生した掘り返し土を斜面部まで運び廃棄したものと推定され、この間層形成をどのように理解したらよいかは今後の課題である。

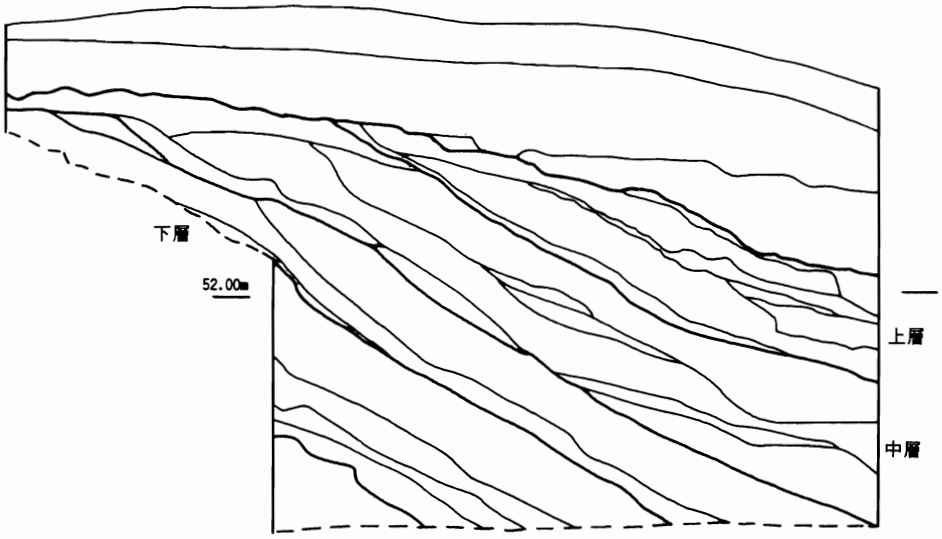
貝層を構成する貝類は内湾性の干潟に生息するものが主体であり、遺跡周辺の自然環境を反映したものであろうが、特定の種類の貝類(マテガイ)の集中的な採集の状況からは、食料資源をより積極的に選択していた状況も推定される。また多量に出土した獣骨からは活発な狩猟活動が行われたことがうかがわれる。詳細については、今後の分析成果を待たなければならないが、出土した獣骨の部位の割合には偏りがあるように思われ、狩猟対象の獲得後、解体、集落への持ち込み、あるいは分配等の問題についても貴重な資料になるものと考えられる。さらに、後期末葉の東北地方に分布の中心をもつ垂飾品の出土は、遠隔地との交流があったことを物語っており、これを可能にした背景についても明らかにしていきたい。

このように後期全般にわたって活発な生業活動が行われたことが明らかであり、また多量の土器や石器、祭祀具、装飾品の出土は居住の拠点が今回の調査区付近に存在することを推定させるが、これまでのところ住居址等は未確認である。晩期に至ると間もなく貝層は遺されなくなり、遺跡の中心は台地平坦部に移動する。これらの要因を含め、今後、整理作業を通じて自然遺物の詳細な分析に基づく自然環境の変遷や生業活動の復元を進める必要がある。

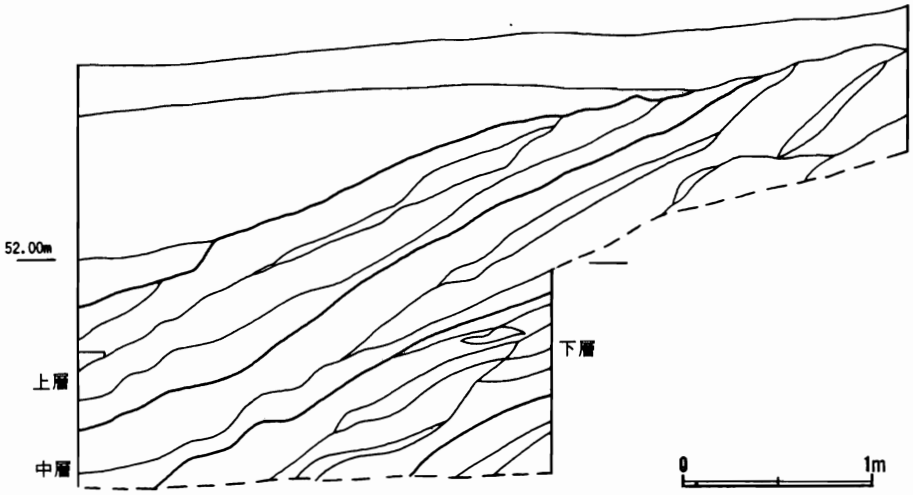
文献

稲野彰子　1989「有孔環状垂飾品とその材質変化について」『北上市立博物館研究報告』第７号
杉原荘介・戸沢充則　1963「神奈川県杉田遺跡および桂台遺跡の研究」『考古学集刊』第２巻第１号
西村正衛　1956「神奈川県横浜市杉田貝塚」『日本考古学年報』９
吉崎昌一　1950「横浜市磯子区杉田遺跡」『日本考古学年報』３





調査区西壁セクション図

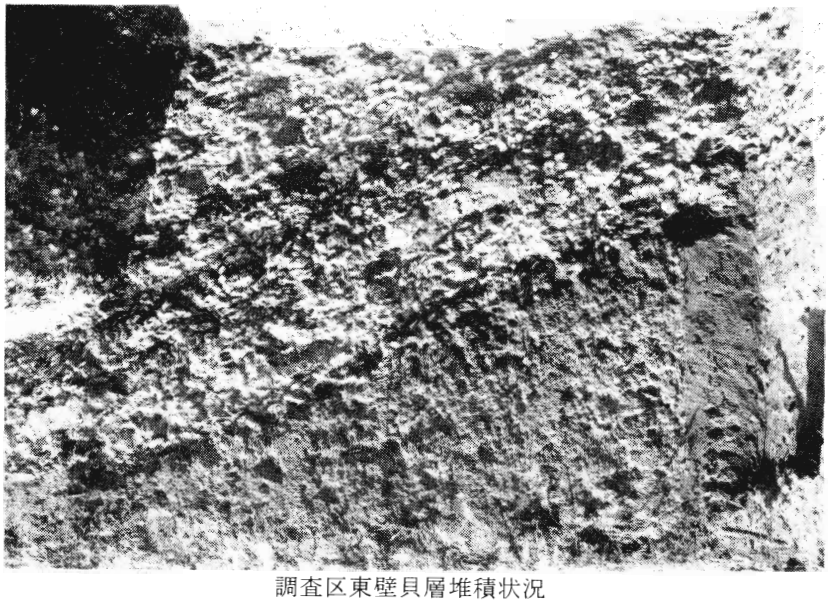


調査区東壁セクション図

第２図　調査区全体図および調査区東西壁セクション図

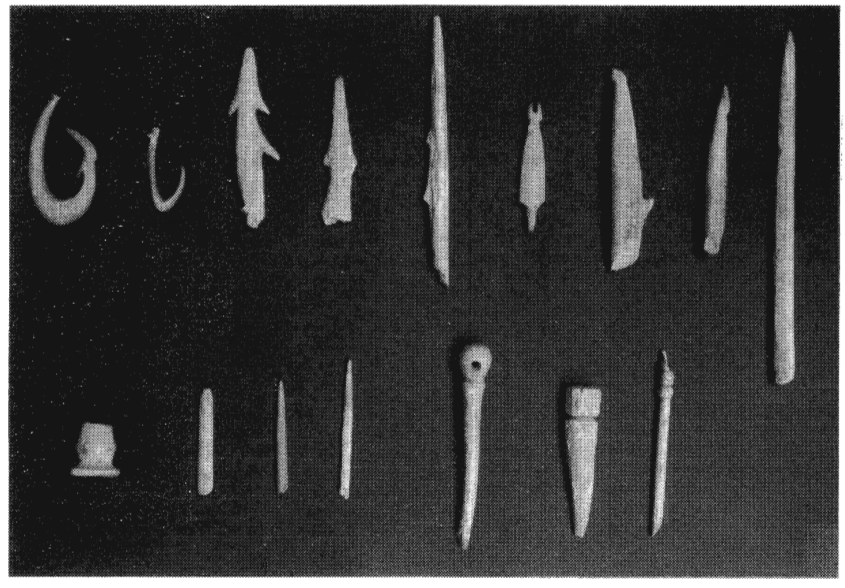
調査区中央および東壁貝層堆積状況

調査区西壁貝層堆積状況

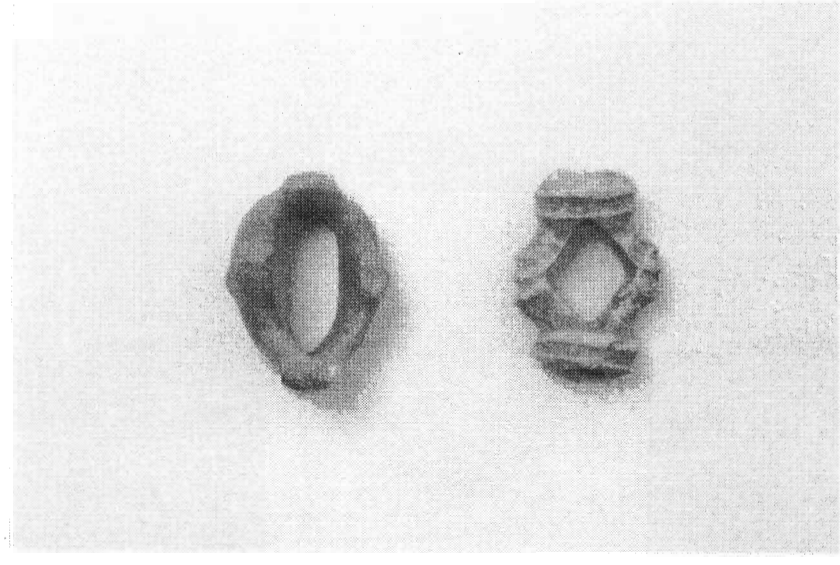


調査区東壁貝層堆積状況

鹿骨製釣針出土状況



骨角製漁労具・装身具



垂飾品

平塚市 真田（さなだ）・北金目（きたかなめ）遺跡群

― 平成12年度の調査成果と前方後方型周溝墓 ―

中嶋由紀子・渡辺　清史

所 在 地　平塚市真田・北金目

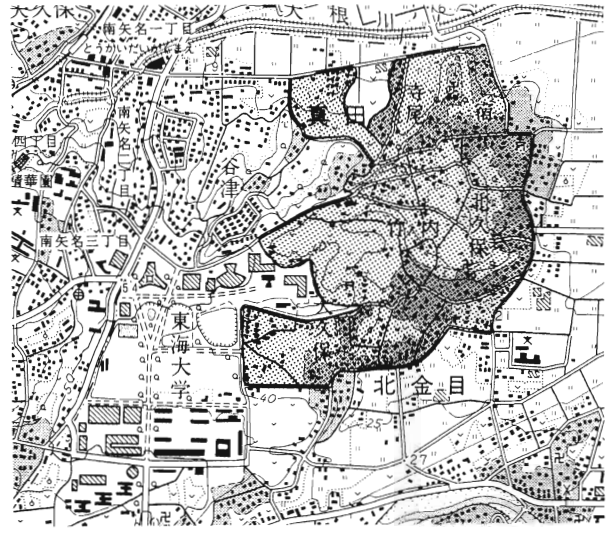
調査機関　平塚市真田・北金目遺跡調査会

調査担当　若林勝司・上原正人・川端清倫・中嶋由紀子・渡辺清史

調査目的　土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

調査期間　平成７（1995）年９月６日～現在継続中

調査面積　約166,500㎡（平成12年度まで）



第１図　遺跡位置図〔1/25,000〕

１．遺跡の立地

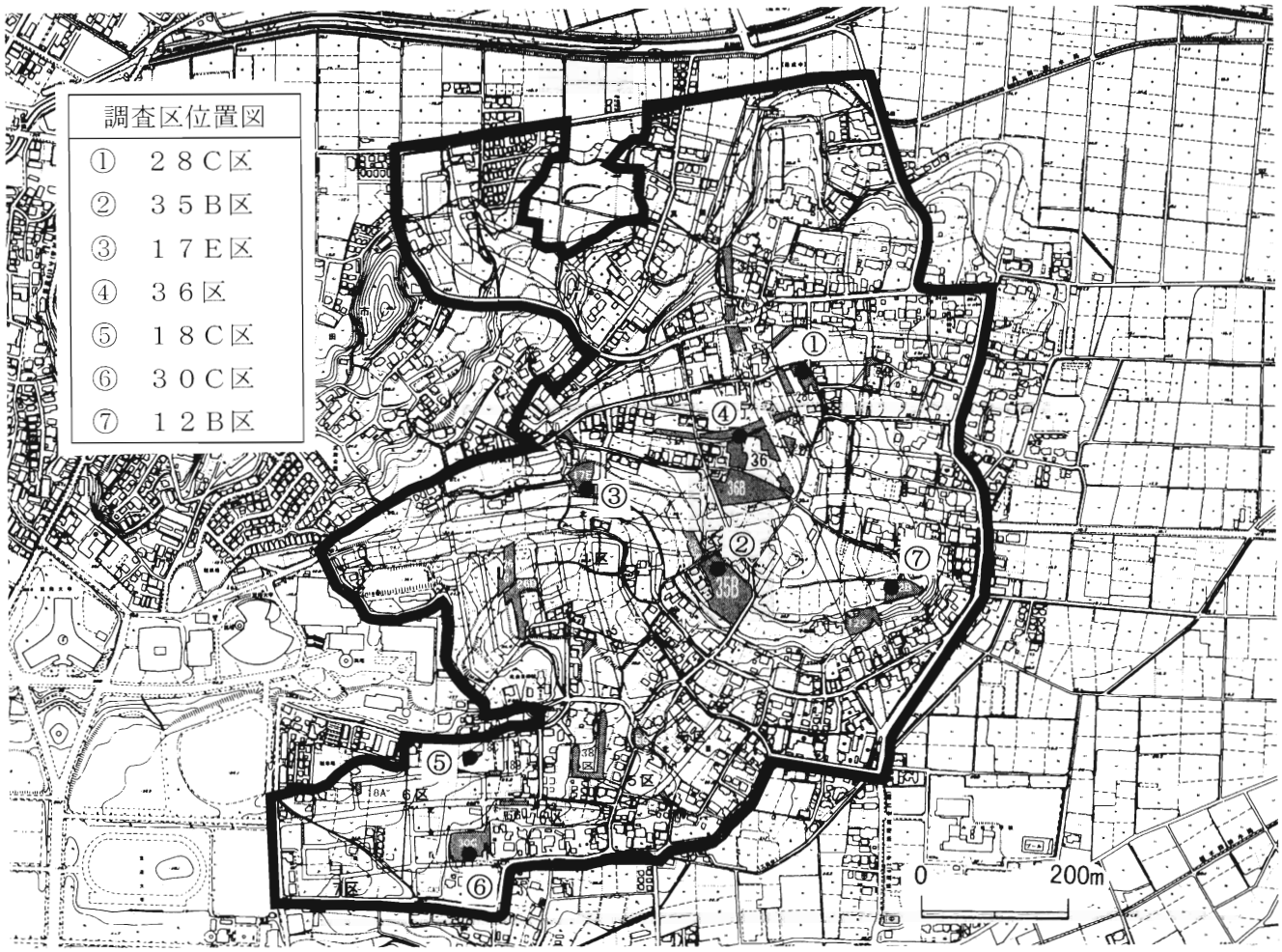
本遺跡群は平塚市北西の秦野市から続く北金目台地の東側先端に位置している。北側には大根川、南側には金目川が流れ、東側にはこれら川によって形成された沖積平野が展開している。調査対象地域内に含まれる遺跡は、平塚市遺跡分布地図によると、寺尾遺跡（№48）、真田城跡（№50）、北金目塚越遺跡（№237）、塚越古墳（№８）、竹之内遺跡（№235）、北金目古墳（№44）、大久保遺跡（№233）、王子ノ台遺跡（№236）、入谷戸遺跡（№238）の９遺跡である。

北金目台地上には、弥生時代中期の集落址や方形周溝墓（砂田台遺跡）、弥生時代中・後期の集落址や方形周溝墓群（王子ノ台遺跡）、古墳時代中期の集落址（高間原遺跡）がある。東側の沖積平野には古墳時代中期の祭祀址が発見された沢狭遺跡が存在する。また、金目川をはさんだ南側の大磯丘陵上には、弥生時代の集落址、方形周溝墓群と奈良から平安時代の集落址を検出した向原遺跡・原口遺跡が存在する。また、大根川を隔てた北東側には、伊勢原市より続く岡崎台地があり、弥生時代の集落址や墓域を擁する赤坂遺跡、上ノ入Ａ・Ｂ遺跡、権現堂遺跡、桜畑遺跡、山王久保遺跡などがある。

２．調査経緯

前述のとおり本区画整理事業地内には複数の遺跡が存在する。したがって遺跡をまたがっての調査も想定されたため、「真田・北金目遺跡群」として一括した。各調査地点を「区」で表示している。

調査は平成12年度末までに37調査区を終了しており、現在なお継続中である。このうち、１～３区は『平塚市真田・北金目遺跡群発掘調査報告書１』で、４～７・９・11区は『平塚市真田北金目遺跡群発掘調査報告書２』で報告済みである。また、第23・24回神奈川県遺跡調査・研究発表会では平成11年度までの成果を紹介し



第２図　調査区位置図〔縮尺1:10,000〕

ている。

３．調査の概要

ここでは平成12年度の調査成果について、12区で発見された前方後方型周溝墓を中心にして各時代を概観してみたい。

平成12年度の成果

縄文時代：この時期にあたる遺構・遺物は少ない。28Ｃ区、36Ａ・Ｂ区から集石が、36Ａ区では陥穴、貯蔵穴と考えられる土坑が見つかっている。共に出土する遺物はないが縄文時代前期に該当すると思われる。

弥生～古墳前期：この時期で注目されるのは、やはり塚越古墳周辺の多数の方形周溝墓群があげられる。塚越古墳東側の12Ｂ区からは前方後方型周溝墓が発見されている。詳細は次項にゆずりたい。17Ｅ区の低地部の遺物集中区からは弥生時代後期の土器と共に大型の木製品が出土している。建物の建築部材と考えられ、付近にこれらの部材を使用した建物があったと思われる。32Ｂ区では昨年度報告にあげた、おにぎり状炭化米、炭化米及び炭化種子が住居址の覆土下層からから再び出土している。

古墳中期：集落は６・18・30区を中心とした当遺跡群の南側に集中している。今回、18Ｄ区で竪穴住居址を確認し、集落域がさらに広がることが確かめられた。

古墳時代後期～平安時代：遺跡群を通して古墳時代後期の遺構は少ない。28Ｃ区で14条の畝状遺構を確認した。畝は東西方向に延び、規模は南北22ｍ、東西20ｍ。溝の規模は、幅25㎝、深度10～25㎝を測る。遺物が少なく、時期の特定は困難であるが、この畝状遺構が弥生時代後期の方形周溝墓を切っていることと、10世紀代の住居址に切られ、周辺に古墳時代中期から後期の遺構がないことなどから、８～９世紀の所

産と考えられる。35区では緩傾斜の南斜面に掘り込みの深い竪穴住居址37軒と掘立柱建物址を21棟確認している。

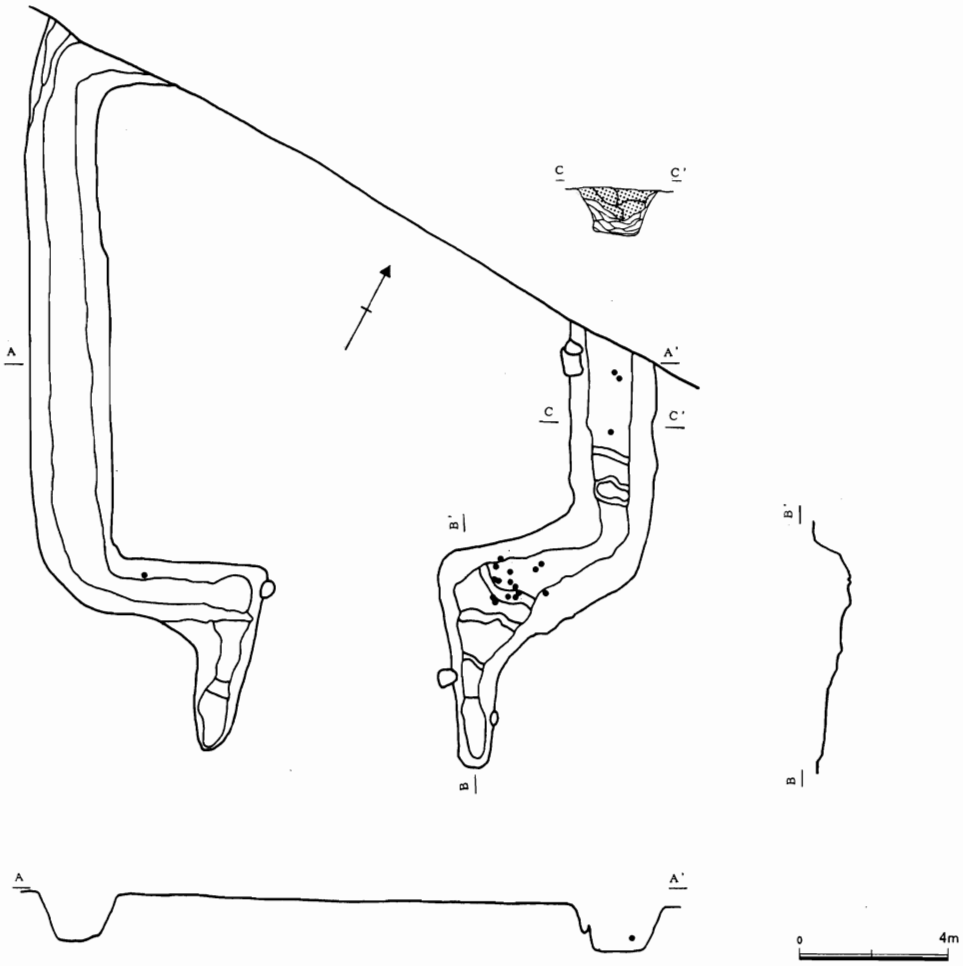
中世：12C区の斜面では段切り状遺構の上段で中世後期の土壙墓群が14基確認された。下段では同時期の掘立柱建物址を構成するピット群が発見され、現在も隣接地が寺院であるため関連する遺構と思われる。19B区で発見された堀は、平成11年度に調査がなされている道路を隔てた西側の32C区の堀へ延伸すると考えられる。天徳寺の近くの32D区では北側へ傾斜する斜面で地下式坑が見つかっている。地形面とそれに伴う土坑とピットが確認されている。

近世：この時期の遺構は各調査区全域から発見されている。その大半が道状遺構、溝状遺構、土坑が主体である。段差や道状遺構に沿うように宝永火山灰を廃棄した溝状遺構、土坑が確認でき近世以降の土地利用の一端を窺うことができる。

前方後方型周溝墓について

12B区の7号方形周溝墓がこれにあたる。標高約32mの緩やかに東に傾斜した台地先端に位置し、塚越古墳が標高約37mであるから、一段低い位置にあることになる。

本調査区（12B調査区）で確認された7号方形周溝墓は周溝の一辺が中央部で陸橋となり、「ハ」の字に開く溝が取り付き前方部を有する。平成10年度に調査が終了した隣接の12A区の周溝と接続し、規模は、全長が推定20.3m、幅約16.6m。後方部は長さ約15.9m、幅16.6m、溝の上面幅約1.9～2.9m、下面約1m、深度約0.7～1.2mで。前方部は長さ約5.7m・幅8.0m、



第3図　第7号方形周溝墓（12B区）〔縮尺1:200〕

溝の幅上面が約1.3m、深度約0.2m～0.9m、溝は南端で完全に立ち上がり全周していない。周溝の断面形態は逆台形を呈し、方台部側がやや垂直に立ち上がり、外側は上端部分が開き気味に立ち上がる。墳丘は確認できなかったが、周溝内の土層堆積から、幾らかの盛り土はあったものと推測できる。主体部は確認していない。

遺物は南東くびれ部分から壺・ヒサゴ壺・甕・高坏等が出土している。壺は無紋だが平塚市南原B遺跡出土の壺に類似した形態である。これら出土遺物は周溝底面より約30cm、上で出土しているものがほとんどである。

塚越古墳（4世紀後半ごろ）と土層堆積を比較してみると、7号方形周溝墓も塚越古墳同様に大粒の黒色スコリアが堆積していた。塚越古墳は周溝下層に大粒の黒色スコリアが堆積し、この層直下から壺・器台が出土している。7号方形周溝墓は中層から上層にかけての堆積だが、遺物は黒色スコリア層直下から出土している。また周辺の方形周溝墓の中に、黒色スコリアが堆積するものとしないものとがあり、1辺が20m近くなる大規模なものにこの土層が見られる傾向にある。今後この黒色スコリアの分析を含めて、時間的な背景の検討を進めていきたい。

方形周溝墓群について

前述でも触れたが、当地区内の方形周溝墓検出数は現在約135基にのぼる。調査の都合上1基を複数区にわたって調査をしているものもあり、今後の整理状況により数値の多少の増減はあり得ることを、述べておきたい。

当遺跡群内での方形周溝墓であるが、単独で存在するもの2地点、2基以上で存在するものが4地点の、計6地点に分布していることが現在わかっている。このうち塚越古墳周辺の台地東端縁辺からが最も多く見つかっている。また

写真1　7号方形周溝墓（12B区）

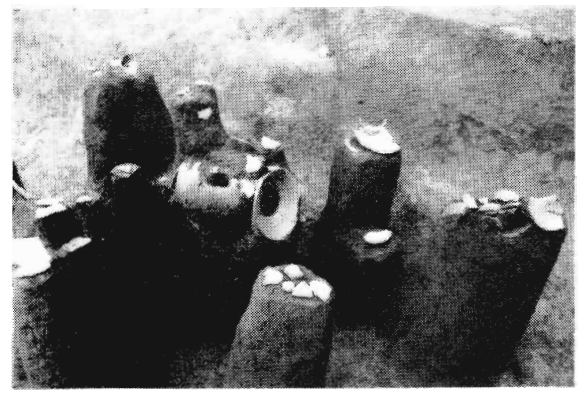
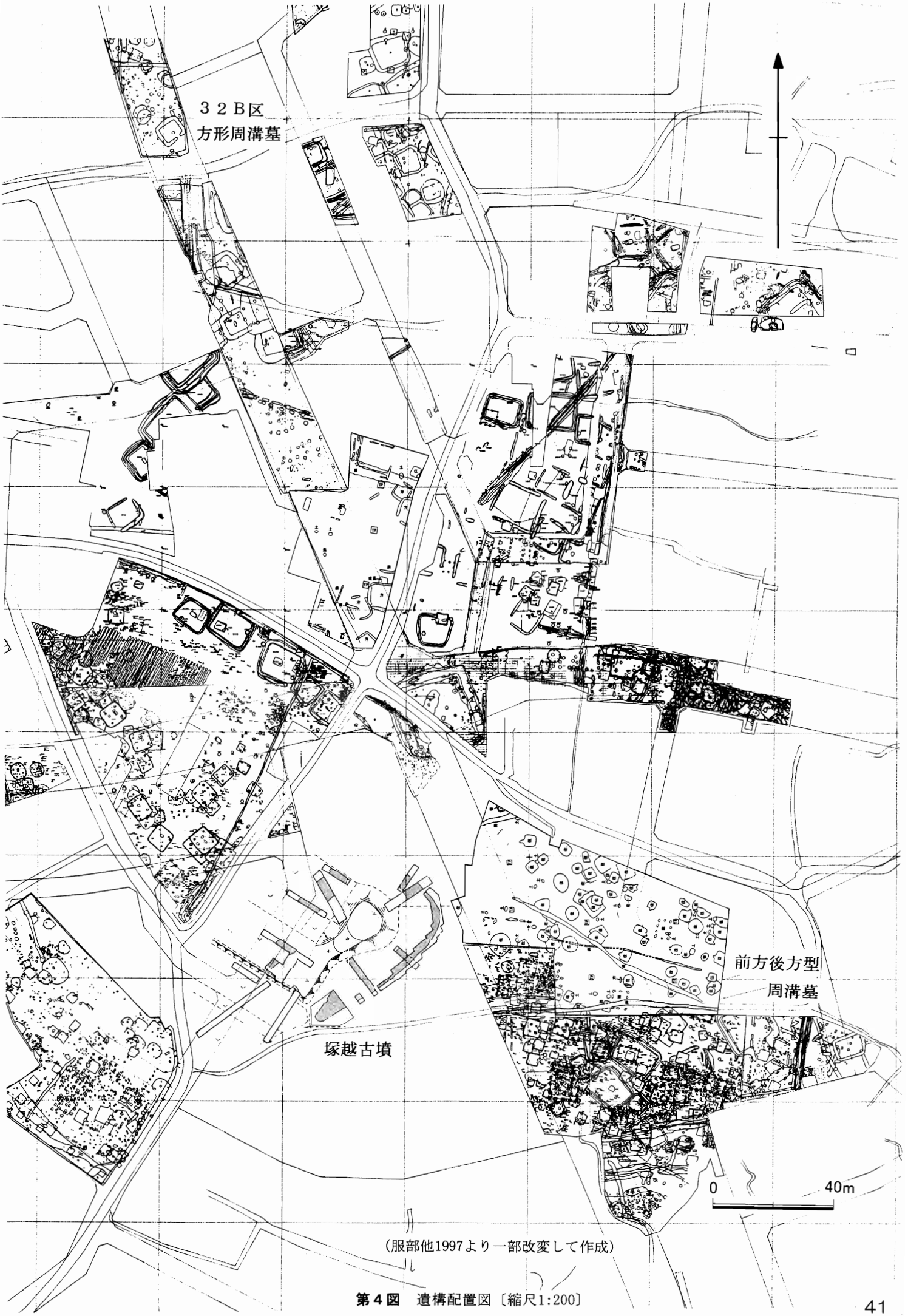


写真2　土器出土状況

台地縁辺に沿って、広範囲に分布している。この方形周溝墓群の中に、塚越古墳や前方後方型周溝墓・方墳が構築されているようである。また、銅釧が3個出土した方形周溝墓もこの一群の中に存在する。

方形周溝墓の規模は1辺5～20mと大小様々であるが、15mを越す方形周溝墓には、そのほとんどに塚越古墳や7号方形周溝墓と土層堆積が類似する点が見受けられ、比較的新しい段階に位置づけられるものではないかと考えらる。したがって、この台地上では弥生後期～古墳前期にかけて継続して造られていたと思われる。

当該期の集落は、この方形周溝墓群をはさんで東側と西側・北側に展開しており、明確ではないものの、墓域と集落域が分かれているようである。この集落も幾つかのグループに分かれよう。区画のような溝も一部で見つかっている。また、塚越古墳東側の住居址群から銅釧・小銅環・銅族等の銅製品も破片ではあるが多数出土しており、銅釧が3個出土した方形周溝墓同様、特筆すべき点であるといえる。



（服部他1997より一部改変して作成）

第４図　遺構配置図〔縮尺1:200〕

4．まとめ

遺構の時期は、土器などから弥生時代終末から古墳時代初頭にかけてと思われる。今回確認された、前方部を有する形態の方形周溝墓は県内で初の発見例となり非常に貴重な資料といえる。

方形周溝墓は周溝が全周するものと、隅部が陸橋になるもの等があるが、周溝の一辺の中央部が切れる形態は神奈川県内でも類例が少ない。県内では横須賀市の松輪大畑遺跡(1981)に始まり、横浜市緑区（現青葉区）の稲ヶ原遺跡(1992)、平塚市豊田本郷（本宿Ｂ）遺跡（1985)、未報告だが本遺跡32Ｂ区などがあげられる。

引用・参考文献

若林勝司・川端清倫・関根唯充　1999『平塚市真田・北金目遺跡群発掘調査報告書１』

若林勝司・川端清倫・関根唯充・中島宏　2001『平塚市真田・北金目遺跡群発掘調査報告書２』

服部実喜・丸山由紀子　1997『神奈川県埋蔵文化財調査報告39』

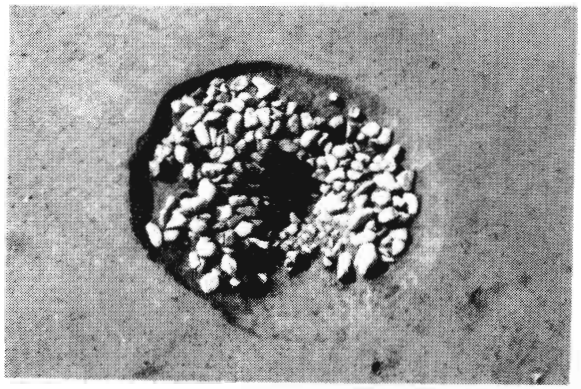


写真３　縄文時代の集石（28Ｃ区）

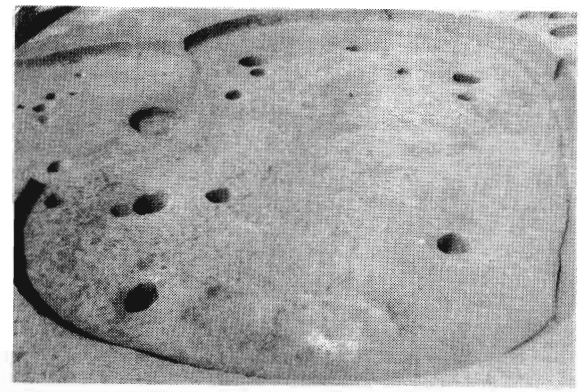


写真４　弥生時代の大形住居址（35Ｂ区）

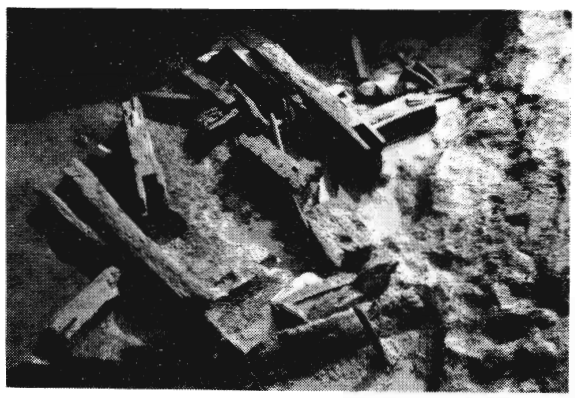


写真５　弥生時代の木製品（17Ｅ区）

写真６　方形周溝墓群（36区）

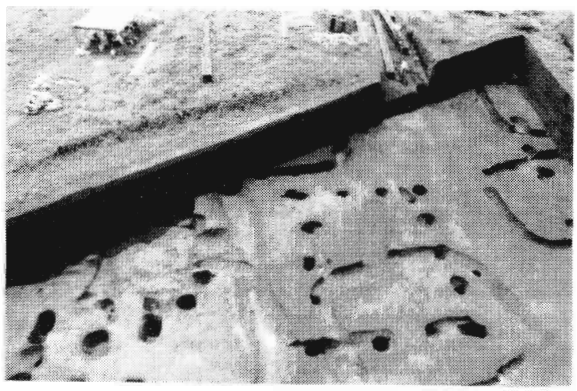


写真７　掘立柱建物址（18Ｃ区）

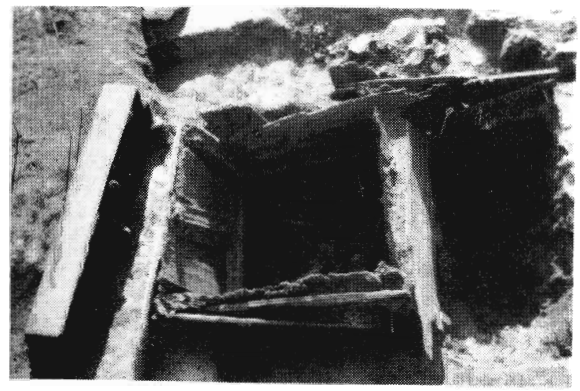


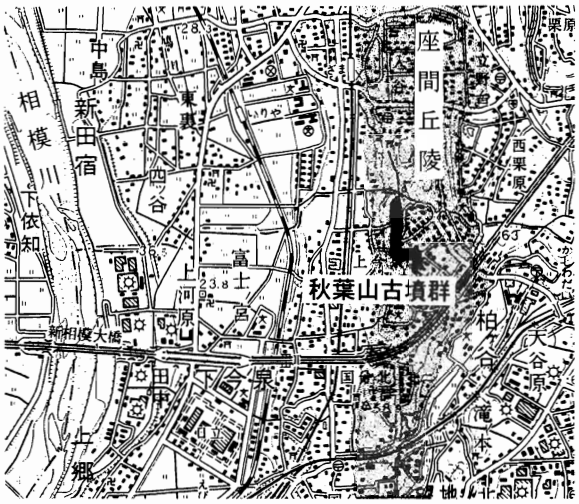
写真８　古代の井戸（30Ｃ区）

海老名市 秋葉山（あきばやま）古墳群

― 関東地方最古級の古墳群・第１号～３号墳の発掘調査 ―

押方　みはる・山口　正憲

所 在 地　海老名市上今泉四丁目
調査機関　海老名市遺跡調査会
調査担当　押方みはる　山口正憲
調査目的　保存目的の確認調査
調査期間　1号墳　1999年　2号墳　2000年
　　3号墳　1997年、1998年、1999年
調査面積　1号墳　105㎡
　　2号墳　96.5㎡（註１）
　　3号墳　128㎡（註２）



第１図　遺跡位置図〔1/50,000〕

１．遺跡の立地

秋葉山古墳群は、相模川中流域の東岸、南北に細長く横たわる座間丘陵上に位置している。前方後円墳３基、方墳１基、墳形未確定２基（推定円墳、前方後方墳）の６基の古墳が標高約76～80mの尾根筋に沿い、クランク状に連なって造られている。

眼下の相模川沿いの低地とは約55mの比高差があり、座間丘陵より一段低い相模原台地中津原面とも約40m近い標高差がある。西側には大山をはじめとする丹沢山系を望み、相模川と両岸の低地を一望する眺望に優れた場所である。

周辺の他の古墳（群）に目を転じると、秋葉山古墳群から2.5km南には埴輪片が出土している瓢箪塚古墳（墳長71m以上の前方後円墳）を含む上浜田古墳群があり、相模川の対岸には、相模川流域最大級の前方後円墳である愛甲大塚古墳や地頭山古墳が目視可能な位置関係にある。

相模川流域の前期古墳は、相模川水系の中～下流域の低地を望む台地、丘陵の先端に点在するという特徴があり、分布的に複数の集中箇所（古墳群）がある。しかしながら、秋葉山古墳群のように各古墳間の距離が数十mと直近に配置される古墳群は他に無く、相模地域の前期古墳の中においては異なった様相を示している。

古墳時代前期の集落分布については、相模川東岸では、下流域に近い海老名市南部から寒川町、藤沢市にかけて弥生時代後期～古墳時代前期の集落跡が多く認められるものの、秋葉山古墳群と同じ座間丘陵上には弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落は認められない。座間丘陵より一段低い相模野台地中津原面での調査例は散見されるが、近接した場所に規模の大きな集落跡は確認されておらず、秋葉山古墳群は集落から隔絶した場所にあるといえる。

２．調査概要

海老名市教育委員会では秋葉山古墳群の保存整

備に向けて、1997から2000年にかけて確認調査を実施してきた。調査は本古墳群の中心をなす１～３号墳について、特に墳形、規模、諸施設、築造時期等について、保存検討資料を得るために行った。

現在、発掘調査報告書刊行に向けて整理途上であるが、調査成果のあらましを報告したい。

なお、各古墳の規模については計測表に示した。

第１号墳

墳形、規模、施設などの確認のため、古墳西側の墳丘から墳裾にかけて５ヶ所105㎡のトレンチを設定し、墳丘、西側くびれ部位置、前方部前面の区画溝を確認した。葺石はなく、墳丘は関東ローム層とその上部に堆積する黒色土を削り出して成形されており、調査区内では墳丘盛土は確認できなかったが、地山成形後、後円部を中心に盛土がなされているものと推測された。出土遺物の量は極めて少なく、くびれ部の墳裾付近からほぼ完形の小型丸底坩、鉄鏃が出土している。

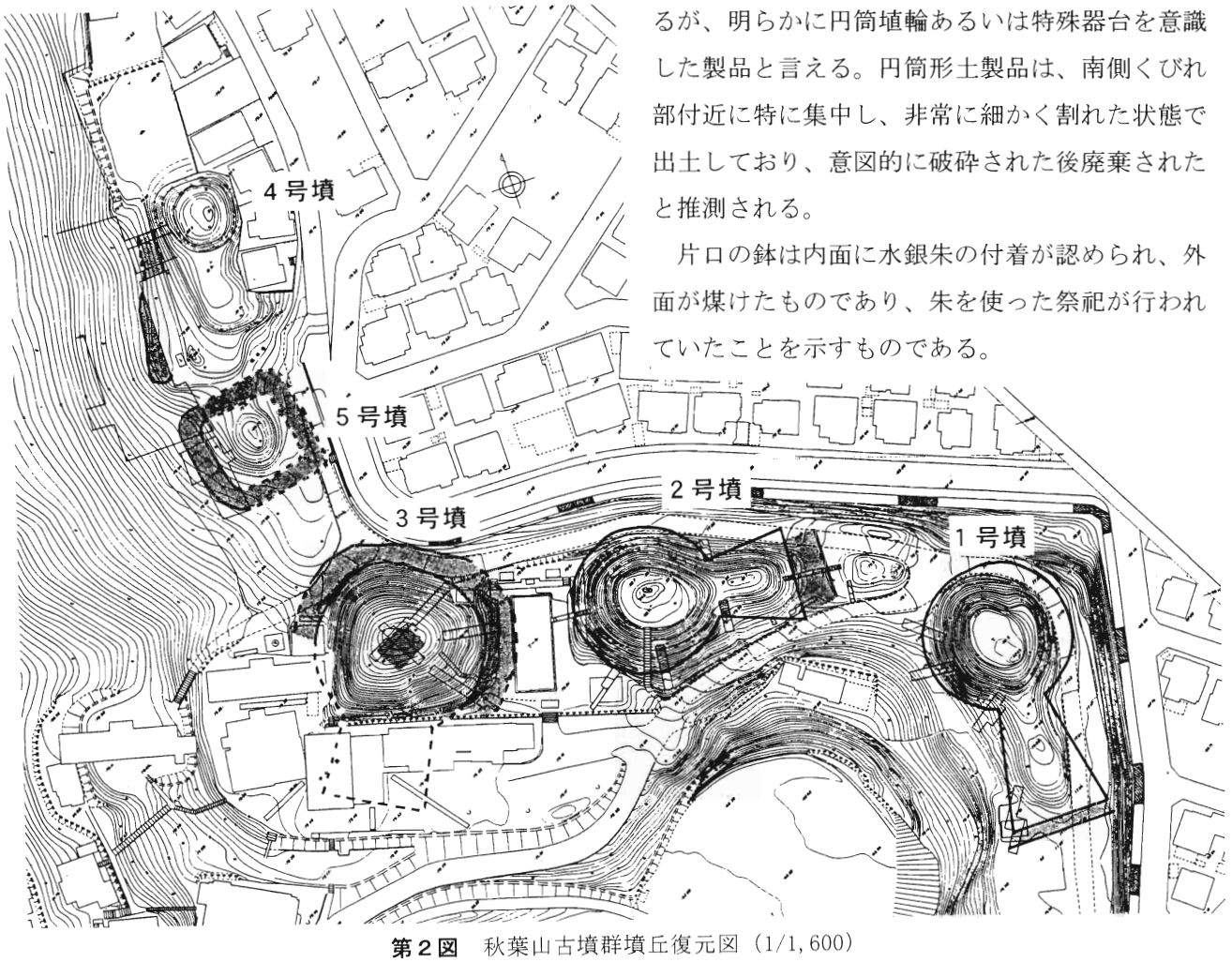
第２号墳

墳形、規模、施設確認などのため、８ヶ所約90㎡のトレンチを設定し、墳丘、くびれ部の位置、前方部前面の区画溝を確認した。葺石はなく、段築も認められない。墳丘は関東ローム層とその上部に堆積する黒色土を削り出して成形後、盛土されており、後円部では約4.5 mの盛土が確認された。

出土遺物は多様であり、大型～小型壷などのほか、特筆すべきものとして円筒形土製品、片口鉢が挙げられる。出土遺物には完形品はなく、意図的に破砕されていると見られるものもある。

円筒形土製品は、丁寧な作りで胴部外面の一部は赤彩されるが、突帯、透かし等の装飾は全く認められない。上部は欠損するため全容は不明であるが、明らかに円筒埴輪あるいは特殊器台を意識した製品と言える。円筒形土製品は、南側くびれ部付近に特に集中し、非常に細かく割れた状態で出土しており、意図的に破砕された後廃棄されたと推測される。

片口の鉢は内面に水銀朱の付着が認められ、外面が煤けたものであり、朱を使った祭祀が行われていたことを示すものである。



第２図　秋葉山古墳群墳丘復元図（1/1,600）

２号墳南側のくびれ部近くでは焚き火の痕跡も認められ、出土土器の中には二次的な熱を受けているものもある事から、祭祀には火も使用されていたことが濃厚である。

なお、２号墳東側にある高まりについては、２号墳調査時のトレンチ調査により、１・２号墳築造時の地山の切り残しであると判断された。

第３号墳

墳形、規模、施設、墓坑などの確認のため、墳丘から墳裾にかけて３ヶ所約82㎡、墳頂部に約46㎡の調査区を設け、墳丘、周溝、墓坑を確認した。

墳形については、現状では、前方部が削平されてしまっているが、過去の航空写真などにより、南側に短い突出部が付いた前方後円形であることが確認できる。

墳丘は地山を削り出して成形、その上に約３ｍの盛土を行っている。段築は認められないが、墳丘下部に葺石状の礫が認められている。周溝は後円部北側と南東側で確認され、少なくとも後円部周囲には周溝が設けられていたものといえる。

墳頂部では不明瞭ながら、おおよそ９×６ｍの墓坑プランが確認された。盗掘は受けていない。墓坑埋め戻し土の上層には黒色粗粒スコリアの堆積が認められ、一部に深く落ち込む部分が確認されている。このことから埋葬された木棺の腐食で陥没が生じ、スコリアが堆積したものと推測される。墓坑の主軸は、墳丘の主軸とは異なる可能性がある。

遺物は周溝内と墳頂部から出土している。周溝内からは、過去の調査時のものも含め、壷形土器が５点以上出土している。いずれも規模はほぼ同じであるが、器形や装飾が異なるもので、穿孔はない。墳丘側から周溝に転落した出土状態を示している。

墳頂部からはスコリアとともに、高坏と台付鉢が２点ずつ陥没部分に流れ込んだ状態で出土している。台付鉢については２点とも鉢部が片口をなす特殊な形態であり、うち１点の鉢部内面には水銀朱の付着が確認された。

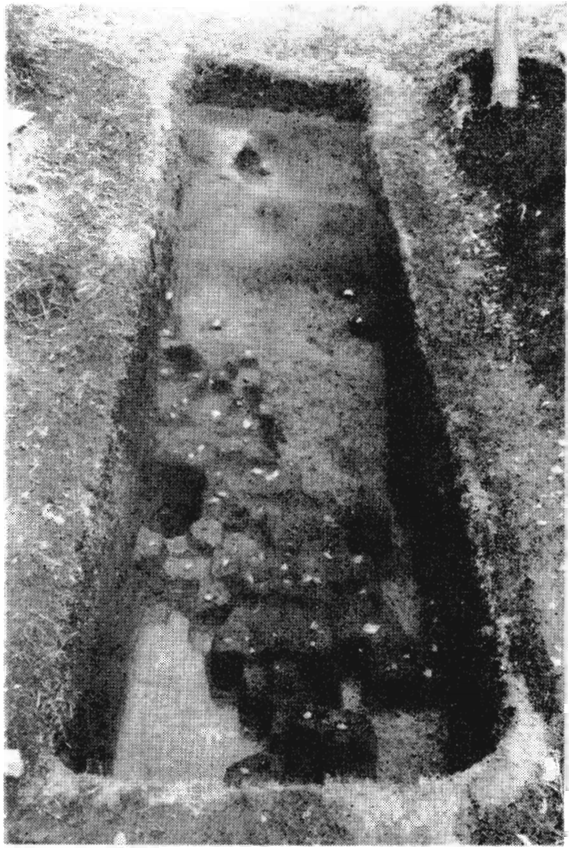
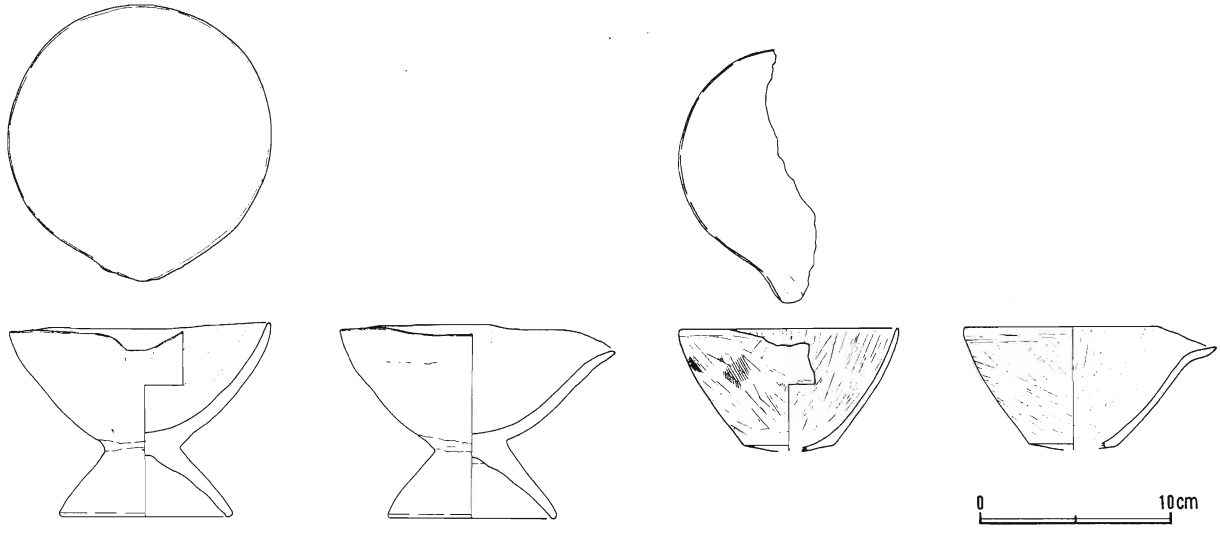


写真１　２号墳南側くびれ部付近円筒形土製品出土状況

写真２　２号墳出土円筒形土製品

写真３　２号墳北側くびれ部の状況



第３図　２，３号墳出土の片口鉢（左：２号墳、右：３号墳　縮尺＝1/4）

写真４　３号墳墳頂部遺物出土状況

３．まとめ

（１）古墳築造の変遷

秋葉山古墳群の各古墳の築造順については土器編年上、３号墳は相模Ⅱ段階新相（３世紀後半）に位置づけられ、庄内併行期新相にさかのぼる可能性が高く、ついで２号墳（４世紀初頭）→１号墳（４世紀代）であると言え、方墳の５号墳は１号墳と前後する時期と考えられる。

墳形について概観すると、３号墳は後円部が不整円形で前方部未発達の前方後円墳とみられるが、２号墳では後円部正円となり、1号墳では後円部径が２号墳と同一でありながら、前方部が長くなるという変遷をたどる。墳丘は、いずれの古墳も関東ローム層を中心とした地山を削り出して成形されているため、墳丘の崩れは少なく、おおむね築造当初の様相を保っている。

土器配置と祭祀という観点からでもそれぞれの古墳で異なった様相を示している。

３号墳ではほぼ同規格の壷形土器が墳丘あるいは墳裾に置かれた可能性があり、墳頂部埋葬施設上では高坏、台付鉢の供献が行われている。３号墳からの出土土器には穿孔や意図的な破砕は見受けられない。

一方で２号墳では、出土状況から3号墳のような同規格の壷配置は認められず、円筒形土製品についても、各トレンチから少量ずつ破片は出土しているものの、くびれ部付近に集中した破片はほぼ２個体分であったため、多数が立て並べられたとは考えがたい。

意図的に破砕されたと見られる土器や、円筒形土製品の出土、火の使用など３号墳とは異なった祭祀が執り行われていたことが伺えるが、２・３号墳とも内面に水銀朱の付着した片口の鉢が出土しており、共通的要素を持っている。

１号墳については遺物の出土が非常に少なく、土器の供献が少なかった事が推測される。

土器の系譜としては、３号墳出土の土器は在地的であるが、高坏には東海的要素が残るものである。２号墳出土の土器には西駿河地域のものとみられる大廓式壺形土器など他地域からの搬入品とみられるものが数点あり、駿河、東海など他地域の直接的な影響を受けている可能性がある。

１、５号墳になると坩が土器構成の主となり、畿内的要素をもつものへと変容するようである。

第１表　秋葉山古墳群第１～３号墳計測表

	１号墳	２号墳	３号墳
軸　方　位	N－0°－E	N－82°－W	不明
全　　長	62m以上	57m以上	45m以上
墳　　長	59m	50.5m	51m（大正期の記録）
後円部規模（推定）	径33m	径33m	約34×38m
後円部墳頂平坦面規模	11.2～12.9m	16.6×12.8m	約15×12m
前 方 部 長	26m	18.9m	不明
前方部前面幅（推定）	22m	20.5m	不明
くびれ部幅(推定)	10.5m	12.5m	不明
墳頂間比高差	3.4m	2.5m	不明
墳裾平坦面周溝底と墳丘頂部（現況）比高差	前方部＝2.8m 後円部＝6.3m	前方部＝4.6m 後円部＝7.7m	後円部＝7.7m

（２）秋葉山古墳群の特色

秋葉山古墳群は、定型的な前方後円墳の出現以前に築造開始された、東日本最古級の古墳群に位置付けられる。

前方後円墳が３基、方墳１基、墳形未確定２基が非常に近接した位置に計画的に配置され、相模地域の中では特異な在り方を示す。３号墳→２号墳→１号墳という築造順であり、墳丘形態、祭祀等の変遷がたどれる貴重な古墳群である。

古墳群の中で最古の３号墳は、墳頂部での土器祭祀を行い、墳丘を壷形土器で囲繞した可能性がある。墳頂出土の高坏は長野県松本市の弘法山古墳、神門３号墳の墳頂出土のものと共通的で相前後するものとみられる。古墳群の中で特に３号墳は東日本における古墳築造の契機を解明する上で重要な古墳である。

また２号墳で出土した円筒形土製品については類例に乏しく、定型的な円筒埴輪が確立されていく過程における在地色の強い埴輪(器台）状のものと言えようか。埴輪の受容を知る上で重要性は高い。

３号墳主体部未盗掘であり、１，２号墳についても未盗掘の可能性は高く、出現期から前期に継続する貴重な情報をもつ古墳群である。

註

註１　２号墳東側高まりの確認トレンチの面積５㎡も含む。

註２　この他、前方部推定場所周辺のトレンチ調査（トレンチ６本、約60㎡）を1999年に実施している。

参考文献

立花実　1998　「西相模の古墳」『神奈川の古墳－その出現と展開－』神奈川県考古学会

西川修一　1993　「相模・多摩丘陵における弥生後期後半～古墳前期の土器と集落の様相」『シンポジウム2東日本おける古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会

赤塚次郎　1997　「西上免遺跡」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第73集　財団法人愛知県埋蔵文化財センター